

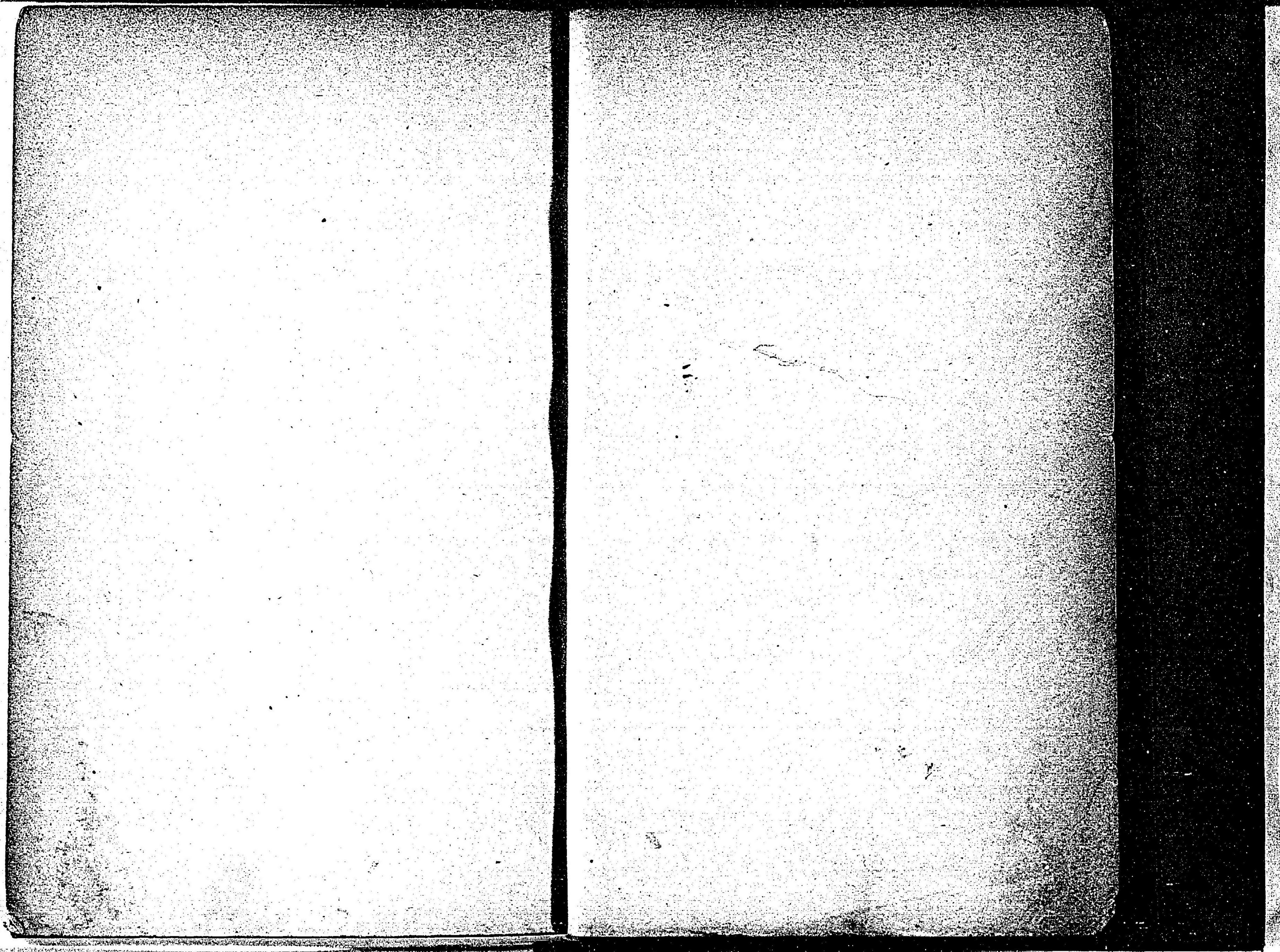
325  
133

過去の宗教と未來の宗教

英國 セネキス 著  
文學士 虎石惠實 譯

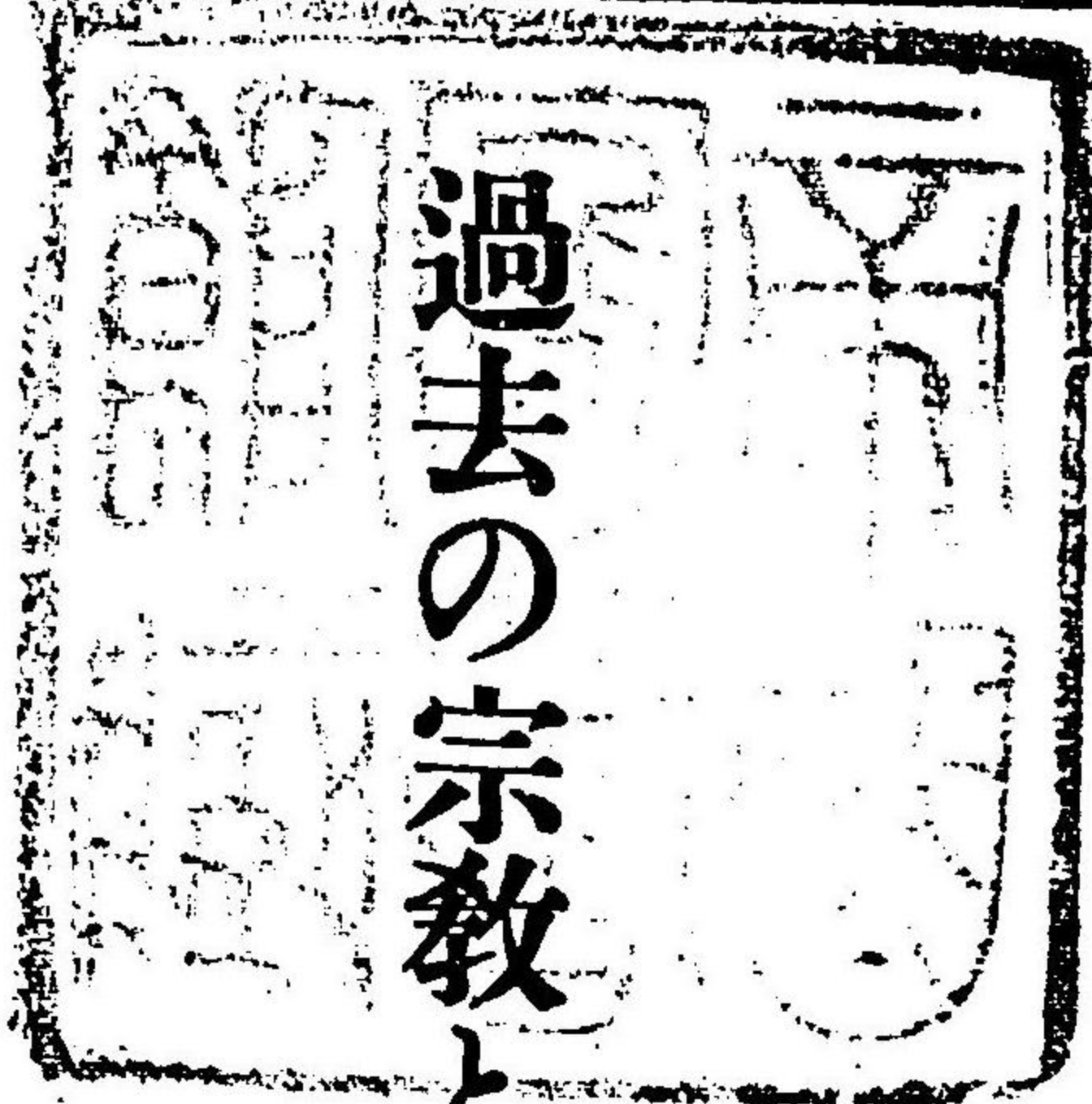
文館館藏







325-1



過去の宗教と未來の宗教

英國セネキス著  
文學士虎石惠實譯

明治  
44. 3. 9  
内交



## 譯者の序言

本書は今を去ること五年前、即ち西紀千九百六年に、英國の一老學者が「セネキス」(老人の意)と云ふ匿名の下に、近世的科學的精神を以て過去の諸宗教を忌憚なく批評し、此等は宗教問題を解決する眞の方法を得たるものにあらず、眞の方法は之と全く別種のものたらざるべからず、而して未來の宗教は之に依りて建設せらるべきものなることを論述せるものである。

著者の所謂過去の諸宗教とは、婆羅門教、佛教、波斯教、孔子教、猶太教、基督教、回々教等である。此等の諸宗教が宗教の根本問題たる神の存在及び性質を説くや、或は想像に馳せ、或は感情に奔り、道理の



命令に聽き、論理の要求に應ずること甚だ少きが故に、其到達せる結果は薄弱にして、やゝもすれば動搖を免れない。然るに一方を顧れば、近世の各種科學は眞理探求の爲めに經驗的歸納的方法を採用して前古未曾有の發達を遂げ、今猶疑々として進歩しつゝある。此くの如くにして到達せる科學上の眞理は確乎不拔である。未來の宗教も亦此經驗的歸納的方法に依りて其眞理を發見せざるべからず、又必ず發見し得べしと云ふが本書の大趣意であつて、乃ち著者は過去の諸宗教が解釋し能はずと爲せる宗教の根本問題、即ち神の存在、神の人格性、神の寛仁大度なる事等を極めて經驗的に極めて歸納的に論證した。是れ即ち未來の宗教を建設せんとする主義方針を示したのである。

かくて本書の全體を通じて論理嚴正態度慎重、引例の如き悉く之を精確なる科學に仰ぐ。之より察するに著者は蓋し専門の科學者か、我は科學者ならぬとも、少くも科學の精神方法を體得し、而も宗教問題に潛念するの人か、而して匿名を以て本書を出版するの理由も亦之に外ならない。著者は本書の結論に於て此事を辯明して、是れ實に過去の宗教と未來の宗教との根本的差異を示すもの。過去の宗教は其主張を擁護すべき人格的權威を要したるも、未來の宗教は唯其議論の果して眞理に合せるや否やを問ふべく、其何人の主張に係るか、は敢て關する所にあらずと言うた。是豈純粹の科學的精神ではないか。

今や我國も世界の趨勢に促されて宗教界頗る動搖し、其將來の



如き混沌として判する能はざるの状に在る。宗教者の或者は從來の教義を萬古不易としてそのまゝ之を信奉し宣傳せんとし、又科學者の多くは宗教を愚民教化の方便に過ぎずとして全く取合はない風がある。乃ち本書は一方に於ては宗教者に對して、今日の科學的經驗的精神が宗教に向つて何事を要求するかを示し、又一方に於ては科學者に對して、科學的方法猶能く宗教の可能を證明するに足ることを教ふるものである。是れ余が多少の勞苦を費して本書を譯出し、以て世人の参考に供する所以である。若夫れ譯筆の原文に忠實ならんことを欲したるが爲め、或は流暢を缺くの恐れあるは豫め讀者の諒察を希ふ所である。

終りに臨んで尙一言したきは、本書が過去の宗教の淵源する所

を究めて、東洋の思想并に政治に對して頗る嚴酷なる筆を弄したるが、幸に我國は立憲制度の採用と共に思想上政治上自由寛容の範圍日に月に擴張せられつゝあれば、著者の批評は固より我國に適用することは出來ない。是れ本書を讀むもの、第一に快とする所にして、又聖代治下の民たるを喜ぶべき理由の一である。

明治四十四年二月

文學士 虎石惠實志るす



## 著者の序言

「バックル」の大著「英國文明史概論」の目的は、經驗主義を脱却して、歴史の研究を科學的基礎の上に置くに在る。

此小著の目的も亦、宗教に關して之と正に相同じである。即ち今後宗教の研究には、通例各種の科學に於て眞理探究の爲めに用ふる所の方法を取るべきことを主張するに在る。

宗教研究遂行上の一新機軸を辯護せんとする本書が、勉めて詳細の事項を避け、専ら大體の趣意と、之より生ずる推論とに注意したのは、讀者の諒とする所であらう。

たやすく會得せられたる概括は、以て人を説服するに足り、又實



に一般公衆の有せる智識の根柢を成すものである。

若し人々が地球の其軸に自轉し、又太陽の周圍を廻轉する球體なることを信ずるとすれば、其確信たる天文學者を煩はす所の奥妙なる計算の故にはあらで、萬人の容易に理解し且つ記憶する比較的單純なる事實及び觀察よりの推論に基くのである。

されば此小冊子に於ても、種々の宗教に見る矛盾せる議論や、通有の缺點を擧げて、眞理に達する新計畫の必要なることを論じ、並に此清新なる努力は、苦心して材料を集め、又他の學問に於て偉功を奏せし經驗的觀察の研究よりして一般原理を推論すると云ふ健全なる基礎に據るべきことを明にしやうとする。

若し此目的にして達せられ「ベーコン」式方法が過去の宗教に特

有なる獨斷主義に代るを得たならば、宗教に一新紀元を劃して、遂に幾多の科學的研究に顯はれたと等しく驚くべき進歩を見るに至らんことは疑ふの餘地がないやうである。



# 過去の宗教と未來の宗教

## 目次

前篇	過去の宗教	………	一
第一章	宗教の問題	………	一
第二章	過去の宗教	………	八
第三章	過去の宗教の何れが果して宗教の問題を解決し得たか	………	二八
第四章	宗教と倫理	………	四三



後篇 未来の宗教……………五一

第一章 斯問題を解決するには他の企

圖が必要である——即ち推理法

を用ふべきである……………五一

第二章 神の存在……………六二

第三章 神の性質……………七五

第四章 宗教的智識の收得に歸納法を

用ふることに就て……………九七

第五章 結論……………一二二

附 録

英國の新聞雑誌上に於ける本書の批評……………一二九

目 次 終

目 次



# 過去の宗教と未來の宗教

英國セネキス著  
文學士虎石惠實譯

## 前篇 過去の宗教

### 第一章 宗教の問題

宗教は人間の最大問題であつて、人心の之に關係せることは今も昔に異らぬが、吾人は今其研究が從來いくばくの成功を得て居るか、又將來之を續け行ふには如何なる方法を最良とするかを成

宗教の問題



るべく明確にしたいと思ふ。

總べての宗教に於て、信仰の大原理と云ふものは數多の僧制僧儀並に物質的なる實用的偶像崇拜と聯關し、且之が爲めに埋沒せしめらるゝを常とする。

未開無學の種族中に行はるゝ原始的宗教には、全く根本原理など云ふものを認むること能はず、其偶像崇拜たる粗にして愚なりと稱すべきである。

かゝる種族に在りては、宗教の唯一起源は即ち無學に基く恐怖である。

電光の天に閃く、雷鳴の空に轟く、熱き日の物を焦す、水の渦まく、皆是れ何か目に見えぬ神秘な畏ろしき力の奇妙不思議な發現で

あつて、其力は了解することも出来なければ、又抵抗することも出来ず、唯成るべく祈禱或は供物、呪文或は魔法を以て之を和げ慰むるに勤むるより外はない。

ところで茲に注意して面白きは、此等の原始的宗教と云ふものは素より無學の所生であるから、知識の増加するに隨つて、雲散霧消することである。

電光の如き、將た雷鳴の如き、吾人の遠祖をして畏怖跪拜せしめた所のものも、今日の科學者は冷靜の態度を以て之を迎ふるに至つた。

而して事態は此くの如くにして始終進歩する、即ち未知は畏れて之を崇拜し、既知は喜んで之を研究する。



古人の目には、凡そ風ほど無規律不可解のものはなく、風は好きな方へ吹くのであるが、今日の観察者は、風と雖も法則の支配に服従し、好きな方へ吹かずして、必ず吹かざるべからざる方へ吹き、而も其吹く方向は計算に必要な事項さへ知れて居れば容易に豫言し得べきことを確信して居る。嘗に此れのみならず、我が地球面上空の大運動を引起す原因及び之を左右する勢力も衆人の知る所である。

尙一層大規模の物質運動、即ち天體の位置の變化に基く蝕や、無學の人々を驚き怖れしめた彗星と云ふやうな漂浪體の週期性も今日は十分に了解せられて、安全に且つ精密に之を豫言することが出来る。

かやうに、知識が増加するに随つて恐怖が減じ、迷信が消ゆるものである。

併し素朴原始の状態に於ける宗教は全くこんなものである。原始の人間は獵と戦とを職として、自己の仕事以外に漠然たる觀念など殆んど懐くことなく、理論的考察の如きは其心頭を煩はすことがない。

然るに大國民が興り、悠々瞑想に耽る階級が出来るやうになると、思想家は拜物拜像の原始的宗教を蔑視して、専ら眼を眞の問題に注ぎ、不結果ながらも之を研究し、之に就て何等かの結論に到達せんと熱心に勉める。

なせかと云へば、宗教の地平線上には一大問題があつて、常に人



の心の前に朦朧として居るからである。而して其問題たるや、神の性質は如何、人は如何に神を見るべきかと云ふことである。

こは數へ切れぬ年月の間人の心を勞せしめた問題であつて、あらゆる大國民の宗教は其國民が此問題に與へた所の答である。各民族の深遠なる思想家は此問題に對する満足なる解決を見出すことに盡力した。而して彼等の到達せる結論は、疑ひもなく其屬する民族の特質を以て着色せられ、其有する知識の程度に由て制限せられて居る。

されば宗教の研究者は先づ此等の大宗教を檢閲すべく、かくて人類が從來如何なる答を當面の問題に與へたかを調査すべきは明白のことである。此の如くにして始めて、吾人は過去の成績が如

何に多きか、或は少きか、又將來に成すべきものとして何が殘るかを知り得るであらう。

されど吾人が此問題の處理された方法を觀察し試験せんとするに先ち、其解決に伴ふ重なる困難の何たるかを考ふるのは便利であらう。

その困難とは言ふまでもなく、惡の起原及び存在と云ふことである。

若し造物主を以て善良仁慈なる者と假定すれば不幸、苦痛、悲哀の如き、現に此世に存在し、又歴史の何れの時期にも存在した惡と云ふものを説明しなければならぬ。若し又之と反對に造物主を以て邪惡、慘酷にして復讐心ある者と假定すれば、單に幾分の理由が



立つのみで、高尚、寛大、慈愛と云ふが如き、世の闇黒にして嫌厭すべき状態と等しく吾人の普く知れる事實を説明するの困難に遭遇するであらう。

## 第二章 過去の宗教

過去とは現在を境として未來と相分つ時期を云ふのであるから、過去の宗教と云へば、苟も今日までに成立した總べての宗教を包含するのである。

そも、宗教が之を生ずる民族の性格や運命を分有するは極めて自然の事であるが、民族の大多數は其存在比較的短くして全然湮没に歸し、唯僅少な民族のみ顯著なる地位に到達し、廣き

地方に亘りて比較的長く支配を行ふものである。かくて宗教中の大部分は單に拜物教か或は、拜像教たるに過ぎない。僅に二三の宗教のみ迷信や僧制僧儀の奥底に、何等かの神學說若くは神學的原理を有して居る。

天然崇拜と祖先崇拜との二淵源よりして、八百萬の神々が出て來たやうであるが、さて萬物を創造し維持する最上原因の哲理的考察などに及んだ民族は甚だ稀である。高尚なる程度の文學技藝に通達した國民すら、宗教に於ては最後まで舊套を脱することなく、依然として多神多主の崇拜者であつた。

東洋古代の最大民族中に於て、造物主の哲理的考察に達したものは唯二種族あるに過ぎない。



印度の思想家は多神未熟の原始婆羅門教より吾人の稱して汎神教と云ふ神觀を發展せしむるに至つた。彼等は此世界を以て萬物を展開し貫通し維持する根本體或は根本力たる神の發現なりと信じた。神と世界とは一體であると云ふ此説より必然に出で來る結論は、世に存在する程の物は神の具體若くは發現であるから萬物は善惡を問はず皆價值ありて崇拜するに足るとしなればならぬことである。

婆羅門教の改良進歩せる形たる佛教も亦汎神教であつて、其考ふる所の神は最上不可思議體である。大洋が空中の水分の由て出づる本源であつて、又其必ず復歸すべき目的であるが如く、神も亦一切衆生の由て生ずる本源であつて、又其必ず歸入せざるべから

ざる偉大常開の懷ろである。

併し婆羅門教にせよ、將た佛教にせよ、此汎神觀を承認するには一個の甚だ明かなる困難がある。極めて單純に又極めて批評に乏しき智力と雖も、悪人若くは罪人の靈魂が神より直接に出で來り死時又直に此に歸るであらうと云ふことを信じがたいのは當然である。とは云へ此困難に遭ひ之を避けんが爲めに輪廻説を採用した。即ちあらゆる靈魂は、縦ひ元と神より出で來りしにもせよ、いつまでと云ふ定めなき連續の變轉輪廻を経て、淨化の後其本源に歸入する資格を得なければならぬのである。

佛教者には神は正當なる存在の標準であつて、其他の總べての存在は迷妄である。其故に異常の者は一旦正當の標準に立歸りて



始めて永き輪廻も止み、個々の存在も終ることが出来るのである。かくて賢明なる人々の智慧は成るべく此結果を早め、之に到る悲惨苦痛の轉生相續を斷絶するに在る。

東洋古代の他の宗教にして、世界を創造支配する根本勢力に就いて一個の哲學説を組織したのは昔の「ヘルシヤ」の陰陽教である。此宗教の思想家は世界を考察して全く異つた神説を想浮べた。彼等は自然界にも又人事界にも、互角相下らざる形を示す勢力ありて斷えず争闘することを觀た。即ち明暗、寒暑、日夜、春夏が互に主權を争ひ、各交るゝ勝者となり敗者となつて居る。同じ様に精神界或は倫理界に於ても喜憂、愛憎、善惡が戰を構へて、何時止むべく又如何やうに勝負が附くべしとも思へない。それで此くの如き觀察

よりして、世界原造の妙力は善惡の二つであり、之を體現したものは即ち神と惡魔とであると云ふ結論を出した。

かくて此二力は同等の勢を有し、而も互に正反對の性質を帯びて、或は勝を占め、或は敗を受け、以て窮りなき有爲轉變の世を経過する。

最初かく同等の勢力が相角逐すると考へたのが、其後人心自然の願望に従ひ一變して、勝敗未定の状態を脱して、明と福とが闇と禍とに終に打勝つべきを豫想し、何時果つべしとも見えぬ争闘をして満足なる結局に到らしめんとて、善勢力は實に優者にして、惡勢力は劣者である、即ち一は主にして、他は従であると假定した。されど此くの如き變更を原説に加ふることは、論理上重大なる困難



を包含して居る。若し悪勢力にして眞に善勢力と同等でなく、其從屬でありとすれば、善勢力は其の相手の悪を逞ふすることに對して責めを負はなければならぬ。これ假定によれば善勢力は其相手を檢束する能力あるに、敢て之を試みぬからである。併し東洋の智力及び想像は論理の支配を受くることが少い爲めに、此致命的非論理的の假定が所謂一神教全體の崇むる所となつて居る。

二元力對立説は勿論「ペルシヤ」民族の特有ではない。人間は所在同一現象に遭遇するを以て、所在同一結論に到達せんとする傾きあるは當然の事である。例せば「エジプト」の神話に於て「オシリス」と「セス」の相互地位並に相異性質は「ペルシヤ」の陽神「オアマゾド」と陰神「アーツマン」との關係に餘り違はない、最初兩者の同等なるこ

とが假定せられた模様もあるが、其後善勢力の「オシリス」が豪勢なりとせられ、隨て終に悪意、害心ある「セス」を征服することに定められた。こはこれ人間自然の志願希望に出でたる而も之より當に豫期すべき意見の變化たることは吾人の既に「ペルシヤ」入の場合に觀た如くである。

さはいへ古代民族の神話の大半は、其周圍の自然物實際の大小位置を知らざる人々の觀察に由ることは明かだ、原始の人間は如何にして東天に昇る旭日が前日西海に沈みし夕陽と同一の天體なりと推量するやうなことがあるであらうか。昇る朝日は同じ家族中の新しく且若き一人であり、又其若き日が老いたる日の子或は弟として、先人の事業を繼承せん爲めに來たと想像するは却て



容易ではなかつたであらうか。自然現象の觀察よりしてかゝる誤謬の推斷をなすことは何れの神話にも澤山あるが、吾人は此等の點に足を停むる必要はない。吾人の目的は唯人類の大宗教に屬する。後代の思想家が發展せしめた比較的普遍且深遠なる神觀を探究するに在る。

是に由て之を觀れば印度聖賢の考察は彼等を導きて汎神教に到らしめ、古代「ペルシヤ」人の觀察と冥想とは、同等なれども反對にして相争ふ二個の勢力或は原理と云ふ觀念に達せしめた。

併し古代「エジプト」の廣大にして錯綜せる僧侶制度、並にその數知れざる神々よりしては、何等の單一普遍の開闢説が出なかつた。尤も一たび殺されて復活した陽神「オシリヌ」の傳説、及び崇拜や、僧

侶が「子は父より出で、又父は子より出づる」と云ふやうな意義判然として而も理解に苦む事を教義信條と爲す風あることや、主なる神々を三位に集むることやは、基督教徒には興味あるに違ひないが「エジプト」の昔の宗教は「ラ」教にせよ、「オシリヌ」教にせよ、其十分なる記録の現存するにも拘らず、神の性質と世界の創造とに關して印度人「ペルシヤ」人の哲理説と比肩するに足る程の哲理説が毫も出なかつたのである。

其他の古代宗教、例せば「バビロニヤ」及び「アッシリヤ」の宗教などに就いても同様の事が言へる。即ち神と神とが互に推合ひ、或る神は成程他の神よりも一層偉大なりと看做されたけれども、未だ曾て單一の一神的世界觀が人心中に曙光を發しなかつた。尤も此等



の宗教中にも交代一神教として、多くの神々の一つに一神たる地位と屬性とを與ふる場合もないではないが、併しかゝる場合は個人的感情氣轉に基いた例外孤立のものであつて、一個の哲理的宗教系統の整齊永遠なる結構を築き上ぐべき基礎とはならない。

茲に吾人の未だ説及ぼさざる一個の大なる古代宗教がある。支那數億民人の宗教たる孔子教は如何であるか。こは一種特別の宗教である。印度の宗教は一の神説を有し、「ペルシヤ」の宗教も亦他の神説を有するが、孔子の宗教は毫も神説を含まず、唯人事に關係するのみである。人間が人間の適當なる研究事項であるとの意か、孔子教は神の性質を論せずして人の本務を論するのである。正當に言へばそは宗教にあらず、消極的道德の一倫理説である。而して吾

人若し消極的道德説が如何程人間の必需に應ずるに足るかを確めんと欲せば、孔子教二千五百年間の成績を研究するに如くはない。吾人の次に考ふべきは吾人西洋近代の者が重に關係する宗教、即ち本來同一宗教たる猶太教及び基督教と云ふ二つの「セム」宗教と、「アラビヤ」の回々教とである。此等の宗教は其信者の稱して天啓教となすもの、即ち人知の普通作用ならで、神が人間の精神と靈妙破格の交通をなすに由るとするものである。而も其根本の觀念と大體の輪廓とに於て別に新奇なる處を示して居ない。其表面は一神教であり、同時に汎神教趣味の語句觀念が全くないでもないやうであるが、主として後代の非論理的なる陰陽教の二元説に支配されて居る。



「セム宗教に於てさもあらんと思はるゝは、神の觀念が「ヘブライ」の種族神たる原始の「ヤヴェー」よりして、後世に謂ふ人類の總父と云ふ觀念に極めて自然的に進化したることである。されど此くの如き意見の變化にも拘らず、神靈に關する根本的觀念、即ち善と惡或は神と魔とが兩々相争ふと云ふ觀念は放棄もせず又變更もしなかつた。「ナツアレ」人の舊派に取て代りし「ポーロ」派基督教徒の間には、三位の一として善靈の觀念が發達したけれども、こは善靈の性質に一層の複雑を加へたのみで、魔即ち惡靈を信することは變更若くは減少しなかつた。隨て基督教に於ては、「エジプト」の擁護神「オシリス」に相當するものが、「エジプト」の破壊神「セス」に相當するものと對抗することは依然たる有様で、つまり「セム」宗教も又「アラビ

ヤ」の宗教も、世界の創造者に關する陰陽教の宿論に對して何等の光明を與へないのである。

今や吾人は、此等過去の大宗教に關して注意すべき第一の點は、此等の宗教が宗教の第一問題たる神の性質に就て唯二個の答を提供するのみなることを知つた。

此等の宗教に就て注意すべき第二の點は、各宗教相互の間詳細の點に於て如何に異なるも、皆是れ共通の起原を有すると云ふことである。即ち此等の宗教は皆東洋的智力より出で、皆俱に同一の極めて顯著なる特色を帯びて、人をして純粹絶對の東洋的觀念が印刻せらるゝことを疑ふ餘地なからしめる。

抑も東洋の社會全體に通ずる特性は專制政體である。其治者は



全權を握りて批評以上に超絶し、其意志は即ち法律となる。かくて不幸にも、千代八千代專制治下に生息した經驗は、人心に治者の命令は雷に抵抗し難きのみならず、又變り易くあり、隨て人間は之を了解しやうなどと望み或は企つべからずして、單純に之に服従することを勉めなければならぬと云ふ確信を印して又消磨する能はざらしめた。是れが太古以來東洋に於ける社會存在の狀態であるから、此くの如き民族の想浮ぶる神の觀念は、彼等が現世の治者に就て自然に懐くに至れる觀念を一層過大なる形に於て復興すると見なければならぬことは誰しも容易に推量し得べき所である。而して吾人が過去の諸宗教を調査する時に、吾人は此くの如きが正しく其れに表はるゝ神の觀念なることを發見する。神は專制で

ある。其行動は不定にして氣まゝである。其動機は不可解にして、人間の其創造者に對する義務は、臣下の其君主に對する義務の如く、奴隸的にして疑を挾まぬ服従を爲すにある。何人も現世或は天上の治者に對して、汝何を爲すかと問ひ得ない。つまり批評と云ふものは未だ生れず、疑惑は即ち不敬であつたのである。

此くの如く、天上の治者は猶地上の治者の如しと云ふ假定の下に、各民族は其智識の狀態と其固有の特性とに隨て、其宗教的信仰の複雑華麗なる組織を構成するに至つた。何れの組織に於ても、造物主たるものは媚を呈せられ、無量無限の讚辭を以て稱せられ、其恩寵を得んが爲めに甘言を以て欺かれ、場合に由りては賄賂を贈られなければならぬ。又衆生は神秘にして氣隨なる治者を慰め、其



忿怒を避け得んが爲めに極めて陋劣卑屈の謙遜俯伏に身を貶さなければならぬ。祈願と犠牲とは絶えず莊嚴なる玉座の前に捧げられなければならぬ。かくて普通の労働者の日々祈禱、讚美、犠牲を奉納することが不充分と思はるゝ場合には、かゝる義務の特別履行に専任なる一階級を以て全人民を代表し、且其利益の爲めに行動せしめなければならぬ。

こは是れかの大宗教組織の何れにも存在する顯著特異の形相である。

以上は即ち過去の宗教である。過去の宗教は東洋的觀念に根ざし、神を暴君、人を奴隸と看做し、其組織の細目は此等の根本觀念より演繹論法に由て開展せしめられた。

かくて吾人は東洋的觀念の強盛なる影響は常に世界開闢説のみならず、人間の態度行爲に關する實際的教訓にも看取し得べきことを知るのである。

此言の證明には數卷の書を著すことが出来る。此短き論文に於て吾人は唯三點のみを考察しやう。即ち人は其運命に満足し、天意に忍従し、又惜氣なく施物を與ふべきものとせらるゝ。満足と忍従と及び浪費的無差別的の施捨とは、東洋全體を通じて昔も今も徳と認められて居る。されど吾人は西洋の經驗と近世の思想とに照して、果して之を徳と認むることが出来るか。満足の結局は冷淡沈滞の外果して何に成り行くか。疑惑が研究を刺戟して智識に到達せしむるが如く、現在の事物に對する高尚なる不満足は、進歩を目



的とする努力に先づ條件にして、すべての人間進歩の根幹である、されど忍従は、回々教徒よ、そは確に推賞すべきものであらう。忍従とは併し何に忍従するのであるか、言ふまでもなく神の意志に、されど神の意志とは何であるか、或人は疾病到る處に夥しきが故に、是れ神意なり、吾人は之に抗すべきでないと思つて居る。電光の建築を打つも、波浪の海岸を蝕するも、天皆かくの如く命じたのである以上、吾人は忍従以て屈服せずしてよいであらうか。然り、吾人はすべて此等の事物と闘ひ、而も正道に合せることを信する。吾人の全力を盡して、吾人を威嚇する危険に抵抗し或は防止せんと奮勵するは、東洋人の宿命的忍従より遙に賢く又良いやうに見える。而して最後に施捨の事であるが、そは東洋何れの國に於ても推賞す

べき所作と認められて居る。して又どの宗教に於ても、恐らく基督敎に於けるほど明白露骨に之を命令しない。乞ふ何人にも與へよとは即其命令である。如何なる命令も之より明白なることが出来やうか。されど幾何の人が果して其命令に従ふか。又之に従つた人が果して何時まで之を満足する地位に留ることが出来やうか。よし其事が出来るとしても、今日は既に無差別の施捨は有害である、即ち非難すべきものであつて賞讃すべきものでないと云ふことは、誰しも承知し、誰しも一致する所ではないか。

以上吾人は東洋聖賢の結論を調査して其敎訓を排斥した。



## 第三章

過去の宗教の何れが果し

て宗教の問題を解決し得

たか

吾人は世界のすべての大宗教を二類に分ち得べきことを見た。其一は汎神教にして、其の他は所謂一神教である。又吾人は後者の根本觀念たる實は二元的であることを注意した。即ち衆善の創造者維持者たる大善神あり、又廣大なれども其大小なり勢力なりが明確でなく、諸惡の案出者擁護者にして、善神と不斷の抗争を爲し一見頗る成功を得つゝある大惡神があるとせらるゝのである。吾人は今此等神説の何れが果してどれほどまで世界到る處吾

人の觀察に觸るゝ、善惡の二勢力が同時に存在して活動すると云ふ宗教當面の大問題に逢ひ、之が解釋を與へ得べきかを考へやうとする。

汎神教が創造者と被造物とを同一に視ることは全然不條理なる臆説の如くに見える。譬へば爰に一野蠻人ありて、初めて一個の動きつゝある時計を觀るとせんに、其推度する所は、(一)其時計は疾うの昔しより存在し、そをして絶えず一定の動作を成し遂げざるを得ざらしむる或本具力に動かさるゝか、或は(二)其時計は或者の創造に係り、其心靈之に宿り之を働かせ、此物に特有なる規則正しき運動を續けるかである。こは自然の推量ならんも、俱に誤謬たるを免れない。それと同様に世界は神の顯現具體なりと云ふ婆羅門

過去の宗教の何れが果して宗教の問題を解決し得たか



教の説も、單に臆説であつて、今の宗教問題に對して到底腑に落ちる解釋を與へない。

若夫れ神を以て善と惡との創造者なりとし、又其何れの場合にも等しく崇拜するに足るとして考ふるに至つては、此際研究者の特性并に境遇が如何に全く其宗教的思考の結果を左右するかを觀察することが有益であらう。而して從來どの大宗教も東洋の人民より出で來りしことを思へば、尙一層此事を心に留むべき必要がある。

吾人は民族の場合に於ても猶個人の場合に於けるが如く、想像か或は理性か感情か或は論理か、其指導力でなければならぬことを見る。而して個人間にせよ、或は民族間にせよ、想像感情が

權柄を握る時代は、論理的知解の支配する時代に先つものである。

東洋人民の間には、其想像が嚴正なる觀察の要求、若くは論理的方法の制限及び着實の爲めに拘束を受くることが少い。

且東洋國民の間には、昔時獨裁政治が當然の事と看做されて、治者の行動が如何に氣隨であらうと、不正であらうと、或は殘忍であらうと、之が爲に何等の批評若くは非難が惹起されなかつた。

併し東西兩洋の智力の間に於ける重なる差異點は次の如くである。(一)東洋人は萬事を轉意偶然に歸し、西洋人は萬事が一定不變の原理法則に従つて整へらるゝと信ずる。東洋人は萬物の創造者支配者を以て、動作不思議にして而も慰めらるゝことを要する暴君なりと信ずるに、西洋人は、苟も此等東洋的迷信を離脱し得る限



り、必ずや造物主を以て、自己の研究が全法界に遍滿せることを示した。かの莊嚴無碍の法則世界を造つた者と思惟するに違ひない。(二)東洋人は一言の不平もなく、其君主の極めて不正殘忍なる待遇に甘んじて屈從するの習慣あれば、神をば公平の命する所や、罪と之に加へられたる罰との合理的比例などを一様に顧みないで、裁判を下し、刑罰を加ふるものと、やゝもすれば信じたのである。西洋人は東洋人の習として治者の壓制極まる動作決意にやさしく従ふが如き卑屈の精神を懷くことは困難である。

兎に角東洋の人民が如何程まで其治者の慘酷極まる出來心に服從するかを知覺し記憶するならば、古來數百萬の東洋人が、神は善惡總べての事物の創造者であり、隨て善惡總べての事物に於て

神の勢力と存在とを認識し、且崇拜すべきことを宣言する所の宗教哲學を奉ずるに至れる所以も吾人に了解が出來るのである。

若し婆羅門教即ち所謂汎神教にして想像的、東洋的、又非論理的であるとすれば、吾人は佛教と稱する其變形に就て何と言ふべきであるか。佛教の信仰に於ては、造られて目に見ゆる萬物は虛妄夢幻、生活は重い苦患と看做され、あらゆる大望の目的は存在の止息即ち寂滅にある。或は總べての個人的存在を打消して、神と稱する漠然無形の本體に一種神變不可解の歸入をなすこと、言つてよい。

何故に此不可解の神が、此夢幻の宇宙と此等苦惱衆生とを現在に如く開展せしめたかは推量の外にある。而も茲にまた數百萬



の人々が全く不可解なるにも拘らず此信仰を懷抱し維持して居る。

此等の二古宗教を去つて吾人は次に孔子教を考察せんとする。されどこは切斷された不完全なる宗教と見るが至當である。凡そ宗教と云ふものは神と人とに關係するものである。即ち前者の支配や慈愛などに關し、又後者の状態や行爲に關するものである。然るに孔子教は此事柄の後半を取扱ふのみである。孔子は實にかう言はれた。神を知らんとするは無益にして又絶望である。汝自身を知り、互に汝の務を行へと。すれば此の場合に於ては、嘗に宗教問題を解決せんとして何等の企圖も爲されざるのみならず、此問題は解決不可能なりと宣告せらるゝのである。

吾人の次に考察せんとするは、古代原始の陰陽教説で、世界は等勢の二敵對力に由て支配せらる。一は則ち善の本源支柱にして、他は則ち惡の本源支柱なりとするものである。

一見すれば此説たるや十分の理由を示して、人智の古來提出せる問題に如何にも尤らしき解釋を與ふるやうであるが、不幸にも試験に堪ふる力がないであらう。先づ第一に、それは自然現象を原始的で、非科學的で、且正鵠を得ない見方をするより生じた説である。昔時の觀察者には相敵對する二主義が何物をも貫いて居るやうに見えた。明は闇と争ひ、熱は寒と争ふと云ふ風であつた。それで此各のものは個々特別の實體であつて、其相異なるが爲に絶えず互に争闘をして居る。かくて此見解は多年持續し、少くも幾分は極近



頃まで残存した「ブリーストレー」の主張し教授した「プロジストン」説すべて燃ゆる物には「プロジストン」と云ふ元素あつて、燃ゆる作用を起すと云ふ説にも之れを認むる。されど吾人の近世的智識に照せば此二元説は消滅する。吾人は彼等古人の二元主義を見た處に統一を見る。即ち熱と寒とは相對的名稱にして、事物の同一状態に於ける異つた位相或は程度に過ぎない。絶對的の寒、絶對的の熱に達することがあつても、それは單に一本の天秤の兩端に過ぎぬであらう。

同様の事が明と闇とに就て言ふことが出来る。明闇は昔し想像せられし如く、二つの個々相異りて互に敵視する實體ではなくして、單に物質の一特殊状態の二つの異つた程度に過ぎないのである。其故に吾人は、二元説を暗示し又其説の根據となつたやうな物

質現象の見方は、誤謬の爲めに、即ち觀察された現象の自然的ではあるけれども致命的なる誤解の爲めに破壊せられて居ることを發見する。かくて此事が氣附く時、かの宇宙二元説が物質的存在状態と等しく倫理的的存在状態と調和し難きことを發見するも、さまざま驚くべきことではないであらう。

物理の範圍を差置て、倫理の範圍を云々する時あることを斷言するは、疑もなく一層困難である。尙予は人間が道德的に進歩し、其遠祖の間に行はるゝより一層高尚なる標準に到達したことを認むるに衆意一致すべきを信ずる。今日の文明人は原始の野蠻人に比して一層才智あり且開化せるが如く、鄙劣殘忍と云ふ事も一層少くなつて居るやうである。特に善と云ふ事に對する人間の考も

過去の宗教の何れが果して宗教の問題を解決し得たか



大に進歩し、又武士道なり親切寛容なりの精神、並に他人に對する顧慮と云ふものが獨り原始の野蠻主義のみならず、例せば猶太教の精神の窮屈峻嚴なる特性にも大に反對して居る。實を言へば絶えず進化が人間の倫理的状態に起つて居たので、世紀の経過するに従ひ其標準も變化し、常に善良、親切、自制の方向に進むのである。されど多年道德的空氣中に觀るを得べき此變化は、善惡の二力が同等であると云ふ古の假定説と明に矛盾して居る。かくて吾人のさきに言へるが如く、物質現象に關する誤解を基礎とせるかの説は、調査の上倫理の範圍に於て確め得べき運動と一致せざることが知れる。

是故に吾人は決論せんとする、陰陽教の古信仰は宗教問題の何

等信頼すべき解釋を吾人に提供することが出來ぬと。

若夫れ陰陽教の後期たる、善力を以て比較的偉大優勢なりと説くことに至りては、吾人既に其論理的無力と、其吾人の求めつゝある光明を吾人に與ふることの不可能とを注意した。

吾人は他の三大宗教即ち猶太教、基督教及び回々教の考察に移らんとする。其言ふ所は、善良、博愛、仁慈の一大神あり、又其外に邪惡、災禍、殘忍の一大魔力ありて之と闘ひ來り、今も尙争つて居ると云ふ事である。

此説明は勿論陰陽教後期のそれと同一であり、隨て同一の異議を容れ得べきである。如上の説明は想像的で而も古代に屬する種族の非批評的精神を満足せしめ得たらんも、自由大膽に總べての

過去の宗教の何れが果して宗教の問題を解決し得たか



事項を探究試験するの風ある近世思想家の智力を満足せしむることが段々出来なくなる。彼等は個人に於て道德的に不正なることは、絶對全能の支配者の場合に於ては寧ろ大に不正でなければならぬと思つて居る。彼等は今自ら人生及び宗教の謎に對する解答を得ないやうであるけれども、さりとて何物をも説明せずして自家撞着に陥れる解答をば排斥する。彼等は、若し造物主にして全能なりせば、惡に對して責任なかるべからざること、惡魔を假定する場合の之を假定せざる場合に異らざることを知つて居る。若し造物主にして全能なりせば一物一有情一外力と雖も其同意許可なしに成立することは出来ぬ。人事上の論議に於ては、みづから容易に且任意に防止し得べき事柄を爲さるゝがまゝに委する人は、

其事を爲したとして責を負はなければならぬことは躊躇なく承認さるゝであらう。他人を代理として事を爲す人は、自身之を爲すなりとは、げに雇主に關する古き法律的格言である。而して其格言が全能を去ること遠き者の場合に當籤まるならば、などか全能なる者の場合に當籤まらぬことがあらう。處で何人も此直言が吾人の今評しつゝある者に對して敬意を失すると判斷してはならぬ。人間中の一大賢君ですら阿諛より寧ろ直言を好む。然るを況や最大者よりも大に、最賢者よりも賢なる彼に於ては益々さうでなければならぬ。吾人は東洋人民の匍匐的態度を永久棄つるにあらざれば、光明の希望を以て眞理と生活との大本源を仰視することは出来ぬ。



汎神教は神を指して善惡總べての事物の直接なる淵源創始にして、萬物の頼りて存し、包んで容れ、萬物の發出し、萬物の歸入する大實在と爲し、以て吾人をして神の顯著多様な發現を萬物に認めしむる。

古代の陰陽教は吾人に告ぐるに二の同等にして永久交戦する勢力を以てし、後世の陰陽教、猶太教、基督教及び回々教は善と惡との二勢力を以てし、善勢力は比較的強大にして遂に勝利を得べしとする。

此等の宗教に關する他の疑問に至ては、何れも此に述ぶることをしない。唯かの大問題に就て何等會得するに足る解釋を與ふる者の一も之れなきことのみは確かである。

#### 第四章 宗教と倫理

宗教は神と人との關係に就て論じ、倫理は人と人との間に行はるべき關係を論ずるのである。宗教の領分に於ては、從來何事も成されずして、殆ど一切の事が残つて成さるゝを待つて居る。されど倫理の領分に於ては、常に實際の進歩があつたのみならず、道德實行の基礎となり、又之を説明する所の理論と云ふものは既に完成せりと稱してよい。

倫理に於て吾人は二の時期を觀ることが出来る。即ち第一期は消極的、第二期は積極的にして、前者は後者に先つこと疑もなく長い。



太古人間が社會を成して共同生活を營み始めた時よりして、一個獨斷的消極的の倫理組織が幾分存在したに相違ない。かくある必要は個人的と云ふよりは寧ろ社會的であらう。凡そ種族は其成員が互に盗み或は殺すことを禁ずるにあらざれば、結合を保つことが出來ぬ。されど初めはかゝる道德的禁制と云ふものは其社會の成員にのみ適用すと思はれた。外人は敵である、之を攻撃し、出來るならば之を殺戮して、其財貨を奪ふのは當然の事であつて、之を保護する道德法は少しも無かつたのである。此第一の或は言換へれば消極的の倫理時期は久しく續いた。

例せば、「ヘブライ」の宗教に於ては、消極的の時期に達したのみで、「モーゼ」の十誡には汝盜むなかれ、汝姦淫するなかれ、汝殺すなかれと

云ふ訓誡あり、唯一の積極的の命令は、人に其父母を敬へと命ずるにある。

孔子が唯一個の文章中に消極的の道德の總べての組織を説明し、解釋し擴充した時に、支那の倫理狀態は亦此の如きものであつた。孔子の格言は「汝が他の汝に爲すを欲せざる事を他に爲すなかれ」であつた。茲に一大法則が總べての特殊詳細の禁止を包含し、且つ之が代用を爲すのである。しかのみならず道德の法則は個人的となりて社會的でなくなり、其範圍も同時に種族若くは國民よりして人種全體に擴げられる。各人が其同類を害し或は惱ますことなきやう命せらるゝのは、それが同族人たり、或は同國人たるが故にはあらで、それが同類であつて、加害を憤り、苦痛を感ずること何人にも



異らざるべきを以てある。

されど基督教になると、吾人は倫理の今一層高尚なる時期に達する。訓誡は消極的でなく積極的となる。孔子曰く「汝が他の汝に爲すを欲せざる事を他に爲すなかれ」と。然るに基督曰く「汝他の汝に爲すべきを欲する何事をも汝正に他に之を爲せ」と。汝他人を害すべからずと云ふは、未だ十分でない。即ち汝は能動的に他人を援助しなければならぬ。而して此能動的仁慈の動機は愛である。汝は汝自身の如く汝の隣人を愛すべきである。かくて汝は此誠實純眞なる愛他の情に促さるゝが故に初めて、他人に對する汝の行爲並に汝の親切なる動作が價值と云ふものを生ずるのである。

此に至て倫理は熱烈純潔の感情に高められた。而して苟も之より一層高尚なる道德の標準を發見し、若くは提示し得べしとは思はれない。

されど此第二の倫理時期が基督教の教に於て頂點に達したとすれば、此に其始めを爲したのではなく、疾くより存在して、徐々に生長し成熟し、久しき間傳播して居つたのである。エジプトには死者の裁判に當り其功罪を天秤に懸くるや、彼は現世に於て曾に其同类を害せざりしのみならず、仁慈博愛にして周圍の人々を援助せりと言ひ立て、此人の爲めに辯護するといふ記録がある。

此の如く基督教の倫理は多年成長の最終結果であるやうに思はれる。何となれば此世界の一物として漸を以て形成せられないものはないから。



併し基督教は曾に「汝が他の汝に爲すべきを欲する事を他に爲せ」と云ふ行爲の實踐的法則を吾人に與へしのみならず、總べての道德の基礎となり支柱となる活動生々の主義をも與へた。即ち「汝自身の如く汝の隣人を愛せよ」と云ふことである。

此倫理法則に伴ひ而も其先驅として同様の宗教的法則或は訓誡があつた。即ち「汝は汝の全心全力を以て神を愛すべし」である。

されど右訓誡は實行し難いやうに見える。吾人は吾人の知らざる者を如何にして愛すべきか。道理は吾人に一神の存することを確めるが、其以上吾人は得る所がない。過去の宗教が與へし神の表示法は衝突矛盾を極め、剩へ吾人の現在する世界の狀態並に人生の分明にして争ふべからざる要素と全然相容れないのである。

地質學や、生物學や、或は天文學の與ふる證據中、萬物の次第に構成し開發することの確乎不拔なること、連續不斷なること、徐々と進歩して止まざることの如く顯著にして感銘すべきものはない。吾人は毫末も氣隨とか、感情とか、或は萬物を支配して無限の空間と無量の時間とを貫く原因結果の不斷連鎖を妨害すとか云ふ作用を見出すことは出來ぬ。

苟も不可思議なる法界の創造者たる神の性質動靜に關して何等か發見する所あらんとせば、宗教は此の如き人力の斡旋若くは邪魔する所とならざる宇宙の年代記の研究に、又人間の生活並に人間の運命の貴きと憐むべきとの方面研究に針路を轉じなくてはならぬ。



此事を成して何等か積極的結論に到達するとき、基督の宗教的訓誡が其倫理的訓誡と同様受納の價值あることを知るも敢て驚くに足らぬであらう。されど吾人にして其智識に到達し得んとならば、先づ吾人は古書中に在る怪しき誤つた神觀を吾人の精神以外に掃蕩しなければならぬ。かくて其間即ち宗教的智識の右時期に達するまでは、吾人は、吾人の眼前にある隣人を愛せよとの倫理的教訓を遵守して、以て吾人未見の造物主を愛するに至る必然の前提とするに甘んじなければならぬ。

## 後篇 未來の宗教

### 第一章 斯問題を解決するには

他の企圖が必要である

——即ち推理法を用ふ

べきである

吾人は此小冊子の前篇に於て、宗教問題に對する二個の解釋が提出せられたこと、尙又どの解釋も廣く且長く採用せられながら、而も検査の上何れも批評的智力を満足するに足らざることを見た。



而して茲に吾人は從來唯一個の研究法のみが人間の研究する此部門に用ひられたことを注意しなければならぬ。人々は内に退き、己れみづからの心の光りと、己れみづからの情の濫かさを以て此問題を考察し、かくて天より啓示を受けたりと強て想像するに至つた。

此研究を遂行する他の方法は何れも不敬なりと云ふのである。是れ吾人の從來崇拜せし金科玉條であるが、吾人は猶之を崇拜すべき筈であるか。

研究の他の部門に於て此事の少しも効なきことだけは少くも確である。

人間の此世界に出づるや赤裸々にして無學文盲であつた其狀

態よりして人間の成遂げた進歩と云ふ進歩は、其有する能力を非常に働かせて獲たのである。天啓は人間が智識の路を徐に且つ困んで登るに際し之に援助を與へなかつた。何故にさう云ふ仕組になつて居るのであるか吾人は知らぬが、吾人に對しては此くの如くであつて其他でないことを吾人は知つて居る。

とは言へ宗教は此一般規則の唯一例外であると假定さるゝ。此場合に吾人は天啓に依るの外何事も學び得ないと假定さるゝ。若し其假定にして正しとせば、幾多の世紀中成就する所甚だ少なく、又天啓はたとひ與へらるゝにせよ、各國各時代に於て相異なる消息を傳へ、かくて數千年後吾人をして吾人の遠祖の如く此事項に對して無識たらしむるは奇怪ではないか。



吾人のこれまで據り來つた此假定と云ふものは畢竟誤つたものであつて、人間は己れみづからの能力を働かせ、其補充として與へられた助けを假らずに此困難に打勝つこと、猶之よりも小なる數多の困難に打勝つた如くあらねばならぬと少くも考ふべきではないか。

過去多年の間吾人は文書の研究に従事して、之を神聖と視るに至つた。

併し今吾人西洋の自由民は奴隸的東洋の想像説及び證明なき記録より轉じて、吾人の面前に展開せる人の手にて書かれざるかの二大書籍を奮つて學ばなければならぬ。即ち自然の大書と人生の大書とである。

自然の大書開卷第一葉に、天文學が宇宙の研究中に含まるゝ不可測の距離と不可思議の時間とを談ずるを見て、驚くべき法界の複雑にして秩序ある限りなき變化を計畫し、且總べて之を單一の法則に依て支配する其人に想到れば誰か敬畏の感情を起さぬであらうか。

古代人の微々たる種族神が當時占むる所の地位は、恰も此取るに足らざる地球を以て宇宙の中心と看做し、天體の廣大無邊なる羅列を觀て、皆是れ世界を照さんが爲めに天空に懸かれる燈火に過ぎすとせし今は既に排斥せられた其學問に似て居る。さりながら造物主に對する吾人の觀念は其動作に照して訂正せらるべきのみならず、其道德的支配に就ても一層正當なる觀念を懷くこと

斯問題を解決するには他の企圖が必要である



が必要である。

東洋の精神習慣、特に其服従的にして治者の方に於ける悪行を寛容することは、東洋の精神が宗教問題に關係するに至つて極めて悲痛有害の結果を生じた。人々は治者を一切の批評より免除すると云ふ此見解を以て、吾々の同胞に若し之れありとすれば吾人は直に愚劣不徳として非議すべき動作品行を造物主に歸することを止めなかつた。

實に過去の大宗教が人心に顯示した造物主の觀念なるものは、如何にも謬見曲解取るに足らず、崇高なる眞理を去る遠きこと猶偶像信者の石像或は木像の如きものなることを思ふはあながち無理ではない。吾人は己れの造りし衆生を呪ひ、又氣まゝに少數者を寵愛して、多數者を最も恐ろしく且不相當なる罰に處すると言はるゝやうな神を愛する理由もなければ、之を尊敬だにする理由もない。吾人は多くの殘忍專横の暴君を畏るゝが如く神を畏るゝことはあらう。而してこれが明に「ヘブライ」人の見解たることは、神の畏れが智の初めなり」の語にも知らるゝ。

されど此くの如き者は萬物創造者の奇怪なるポンチ書に過ぎずと吾人は信ずる。何事によらず苟も人間に奇妙不可解に見ゆるものを以て神の忿怒に歸すると云ふ考は、古人には極めて自然にして吾人には到底容赦し難い欺惑である。彼等は雷雨若くは日月の蝕を神怒の前兆と看做した。萬物は、何事も秩序正しく、且一定不變の條件を有し、忿怒とか偏頗とか云ふ人情類似の事を少しも發

新問題を解決するには他の企圖が必要である



見し得ざる一大計畫の部分たることを吾人は知つて居る。

若し吾人にして苟も物質世界に於ける壯大にして調和せるもの、大小を問はず萬物の驚くべき且つ無限に變化する順應の創造者を考ふるに至らば、吾人は之を尊敬せずに居られないことを感ずる。さらば愛に就ては如何であるか。若し吾人にして視線を物理の領土より人間の生活に轉するときは、あらゆる高尚なる奮發、他人に對する寛大なる同情のあらゆる例證、自己犠牲のあらゆる場合、策畧の爲めでなく愛情の爲めなる義侠にして制限なき援助のあらゆる行動は、吾人をして人性の至て善く至て高き倫理的發達の天的淵源なるものは、苟も吾人にして之を知り且つ解し得るものとせば、大に吾人の愛を受くるに足るものならざるべからざる

ことを確信せしめる。

是故に吾人が造物主を發見しやうとするには、臆測を逞うし若くは想像を働かせず、苦心入念其既に爲し、所と今現に爲しつゝある所とを研究するに如くはない。

吾人は過去の宗教が説示した神の考より一轉して、新たなる研究の遂行に向はなければならぬ。かくて今後吾人の宗教研究に於て、吾人は近世的即ち歸納的の論法を利用しなければならぬ。而して其科學的眞理確定法の眞髓は何れにあるか。歸納的論法の眞髓たるや、論理の基く所の材料即ち事實なり觀察なり或は統計なりが當に信頼するに足るのみならず、尙又適當ならざるべからずと云ふことである。不適當の根據に基づく推論は常に誤れる結論に

新問題を解決するには他の企圖が必要である



達し易い。又到達せる結論を信受し得るは其觀察範圍が十分廣い時に限る。さはあれ概則は實例に依りて衆人に一層明瞭となるものなれば、吾人は一外人が夏時或る國に到りて四日間滞在し、四日の中三日雨天であつたと假定しやう。若し其人が自分の手許にある此れぎりの材料に基いて推斷するならば、此國は雨多き國なりと結論するであらう。併し其四日間の天氣は或は例外なりしやも測られず。若し今の旅客にして四日ならで四ヶ月或は四年滞在したらんには、明に尙一層信賴すべき結論に達し得たであらう。これだけの事は極めて明瞭のやうであるが、實際には、全く信用するに足る材料より健全に推論せる多くの結果も、十分に廣く且つ適當なる根據を得ることを怠りし爲めに全然破壊に歸してしまふことがある。

宗教の場合に於ても、吾人は吾人の研究をして人類の積み集めた觀察、考究、經驗に基かしめなければならぬ。吾人は既知より未知に上進しなければならぬ。吾人は何事によらず自明ならざる若くは證明し難き事を假定してはならぬ。正に此くの如く吾人は唯徐々に進歩をなすことを期せなければならぬ。されど吾人の爲し得る前進の一步々々は確實にして持續するであらう。かくて未來の宗教の場合に於ても、既に一般に科學の領分に於けるが如く、其の進歩は單に或る一個の社會ならで全人類の遲緩にして而も確實なる進歩であるであらう。

さて此研究を遂行するに取るべき第一歩は何であるか。吾人は



先づ凡そ宗教と云ふものが果して可能なるや否やを考察しなければならぬ。然るに宗教は神人間の關係を論ずるものであるから、第一に神と云ふものゝ果して在るや否やの疑問を決定することが明に必要である。神の觀念は人類種族の間に殆んど普遍であるが、それだけでは神の存在を證明して居るとすることは出来ぬ。是を以て吾人は次章に於て宗教の缺く可からざる基礎なりとして神の存在を論せんとする。

## 第二章 神の存在

苟も意義曖昧なる名辭の解釋を最初精密に定むることは常に願はしくあるから、吾人は「神」と云ふ語を吾人に對して「萬物の創造

者維持者」を意味するとして定義したいと思ふ。

然らば宗教の研究者に現れて來る第一の疑問は、目に見ゆる宇宙と目には見えぬと實在するかの倫理的要素とを創造して、之を維持し支配する何物か、果して存在するかと云ふことである。

ところで形而上學的の精巧幽玄なる議論はさておき、吾人普通の常識なり、吾人が他の總べての事項に於て眞理確定の爲めに依據する知能なりに訴ふれば、宇宙は變轉極りなく、且つ勢力保存の爲めに常恒にして不滅なる永遠的勢力に動かされたる不滅の物質であるか、然らざれば宇宙は自體以外又自體以前の或る勢力が實在か若くは睿智かの創造に係るとするのである。

永久に存在し永久に運動して、始めもなければ終りもあるべき



筈がないと云ふ説は吾人さのみ長く顧慮するの要を見ない。こはつまり證明せられざる又證明すべからざる假定に過ぎないのである。こは宇宙の特質たる秩序と調和とに對して何等の説明をも與へないのである。こは素より非科學的であり、隨て得る所が少いのである。

自動的無智的の變化が限りなく繼續して、全體を統裁し説明する生々の智力が毫もないと云へば、こは宇宙にあらで百色眼鏡にも如かざる或る物たるに過ぎない。

百色眼鏡は器械的變換の限りなき連續を示し得るが、宇宙には物質が特別の用途と事情とに特別に順應する事があつて、百色眼鏡の要する智力とは全く種類の異つた智力のあることを雄辯に

説いて居る。且百色眼鏡すら獨りで出來たのではなく、其存在の條件を整へ定むるには智力が必要であつた。

此等の理由に基き、吾人は宇宙を以て永久的自動的なりとする説の上に長く彷徨するを要しない。唯一個の注意を之に關して爲せば足るのである。即ち、若しかの説にして眞ならば、其時こそ人の心はもはや宗教に就て煩勞するの要を見ない。何となれば吾人は避け難く又窮りなき連續的變化の部分に過ぎぬと云ふ説である以上、苟も言葉實際の意味に於ける宗教と云ふものは吾人に可能でないであらうから、吾人をして有智的第一原因を假定するに至らしむるは、實に主として天體の多様複雑なる成分并に運動の調和に由るのである。



宇宙の成立し進行するは、恰も自動的必然的方法に依て宇宙に生ずと信せらるゝ尋常普通の状態相續に因ると云ふことは、此大自動器械の作用が如何にも齊整圓滑であり、或は物質の靜的及び動的状態が熱の法則條件とか、所謂重力の法則とか云ふ如き僅少の一般法則若くは根本條件に依て如何にも美麗に完全に支配せらるゝ所以の理を説明することが出來ぬ。

吾人は經驗に依りて、偶然と云ふものは混亂と混沌とを來すもので、規則正しきこと、秩序ある相續、并に調和と云ふものを生じないことを知つて居る。而して金屬の數片を箱に入れて之を振れば、偶然にも一個の時計若くは蒸汽機關を發生すべしと信ずることの困難なると等しく、偶然に物質の原素——此原素其物も亦偶然

に發生せるもの——よりして天體の吾人に表す奇觀、或は我が地球を仔細に研究すれば看取し得べき目的に對する手段の複雑精緻を極めたる順應を發生せりと想像することは困難である。

此意匠論は言ふまでもなく極めて古きものである。されど三角形の二邊が第三邊より大なることを證明する議論もさうである。論理的議論の場合に於ては、新奇必ずしも推奨するに足らず、又舊古必ずしも非難するに及ばない。否、それどころか、論理法の舊古にして未だ嘗て辯破せられしことなきは、却てますく之を強むるのみである。何となれば論理的に有力にして正確なることが以て一個の議論を推奨するに十分なりとすれば、萬人の鋭き智力の検査吟味に見事抵抗し來つた其議論が一層容易に受納せらるゝか



らである。

其故に造物主若くは第一原因が果して在るか云ふ疑問に對して一個以上の答があり得べしと想像するは今日の思想家には困難である。

而して昔時人々には科學的正確と云ふことなく、又吾人現在の智識の比較的廣大なるに及ばなかつたけれども、彼等は一般に同一結論に到着した。

是れは主として人間の腦髓は苟も有機體若くは有機組織が空無より發生すと考ふること能はざるに因るのである。吾人は本能的に感ずる、吾人が原子或は分子の一凝集にして、混亂混沌を見ず、順當正規の變化を呈するものに遭遇する毎に結果は原因を要す

るものであることを。

而も此本能的感情は科學的研究の全體に由て十分確めらるゝ。即ち極めて微小にして明に價値の極めて少き細事よりして、物質の法則若くは條件の極めて廣大極めて一般なるものに至るまで、所在原因と結果との不斷に働いて居るのが分る。然らば若し此不變の法則を推して小より大に溯り或は進むの後、吾人にして吾人の感覺其用を爲さず、研究の續行吾人現在の實力以上なる時、此法則は最早適用せずと假定することあらば、其假定は全然非論理的であるであらう。

然り如何なる結果も之を推して原因に達せざるはなきが如く、正に吾人は宇宙の大なる根本的活動的の進行にも亦知覺し發見



することこそ難けれ第一原因のあることを確信し得る。

此くの如き方法にて吾人は萬物の第一原因或は創造者が存在すると云ふ確信に到着する。此確信たるや通常の論理的論法に基き、臆測を根據として古宗教の證明なき非道理的信仰に固有なる疑惑動搖に陥り易き、證明不可能と假定せられたる敬虔的意見とは根本的に異つて居る。

若し吾人燧石の一片を拾上ぐる時、其形状構造よりして偶然が決して之を作為せしにあらず、此れ智力ある者の細工にして、或る特殊限定の目的の爲めに作りしと論じて差支ないならば、吾人を圍繞せる廣大なる又微細なる物體や生物や現象の存在は偶然の故でなく、意匠及び智力の所爲なることを吾人の信するのは尙

一層差支ないのみならず、絶対に嚴重に必要である。

然らば天體を考察して之を組成する元素を確め、望遠鏡もて天界の無限なる距離、莊嚴なる秩序、顯微鏡もて吾人の周圍にある極めて小く極めて些細なる事物すらの驚くべき美麗と完全とを知り、自然總體が唯一個の簡單なる物質の法則或は條件に管理指導せらるゝことを見る所の吾人は是非かう云ふ事を感じなければならぬ、此くの如き驚くばかりの變化が此くの如き優秀なる調和や、目的に對する手段の不思議なる順應と結合せるは偶然の結果と稱する能はず、想像し難く理解し難き威力と智慧とを具ふる一個の創造力が存在することを誤解の出來ぬ強音を以て宣告して居ることを。



されど或は曰ふであらう。是れそもく何ぞや。人々は既に正しく此議論に依りて全く同一の結論に達したではないか。新奇果して何くにあると。

其方法に於ても、又其到達した結果に於ても、固より新奇なる處は少しもない。けれども其事たるや吾人に取つて大切此上もない。何となれば吾人が道理は宗教の唯一確實の基礎なりと斷言する時に、吾人は誤つて居る。宗教の範圍に於ては獨り信仰のみが支配する。道理は宗教の問題を解釋するに全然不適當であると言はれるからである。

勿論吾人はかゝる言議を顧みない。吾人は理性に訴へる。而して吾人の發見する所は何であるか。道理は吾人に何事をも爲し得ざ

るか。否吾人に提出せられたる其第一の問題は、事實及び觀察よりして之れが考察試験に由りて必然に生すべき結果に推論すと云ふ通常の方法を以て解釋せらるゝ。

されば今後吾人に取つて、萬物の有智的創造者維持者の存在し、又存在せざるべからずと云ふ眞理は智識の事柄であつて教義の事柄ではないのである。

道理の補助に依りて吾人は宗教的智識に第一步を進むることが出來た。實にそれは第一歩たるに過ぎないが、以て道理に此事件を取扱ふ資格あることを證明するに足り、かくて吾人を勵まして、吾人が將に吾人を待つ所の多くの他の難問題を研究せんとする時同様の成功を豫期せしむる。



此に暫く止まつて、神存在の疑問を論ずるに際し、人々をして教義を棄て、道理に就かしめたるものは果して何なるかを考ふるは有益の事であらう。そは無神論者の攻撃に因るのである。或る人々は聖書及び教義が眞理の基礎として不十分なるを確信する餘り、輕躁にも宗教の全組織が其根柢迄で腐朽せりとの結論に躍進して、神などの毫も存在せざることを斷言したのである。彼等の誤謬は拆伏せられなければならぬ。彼等は聖書及び教義の權威を拒斥した。それで信仰ある人々は道理に趣き、かくて思はずもかの新路に就いた。吾人にして熟慮もて之を採用し、才智もて之を追窮し、さへすれば、是れこそ吾人を導きて如何にも偉大なる結果に到達せしむることは疑ひない。

### 第三章 神の性質

宇宙の構造や條件を調べ、之より論理的に推度して、萬物の有智的創造者支配者の必ずなければならぬとを合點した上は、取るべき次の手段は言ふまでもなく道理が吾人に存在を確保するか、の莊嚴なる存在者の性質如何を考ふるとであるやうに思はる。されど右研究を遂行せんとすれば、吾人は吾人の注意を喚起し得べき至大至難の事業に立入ること明かである。而して此問題を解決せんとする如何なる企圖よりしても、問題の要點を瞥見し、出來得べくんば取りて宜しかるべき方針に關し多少の暗示忠告を與ふりより以上のことを豫期するは無理であらう。



此研究を始めんとするに當り、考ふべき第一の疑問はかうであるやうに見ゆる。即ち神は非人格的であるか、或は人格的であるか、他の語を以て言へば神は非人格的な觸知し難く名狀し難き實體であるか、或は可見不可見の宇宙を創始し維持する有智者であるかと云ふ事である。

されど吾人は既に偉大なる印度宗教の主張に係る前説を考察して、之を否定せしのみならず、意匠と云ふ證據の上に神の存在に對する吾人の信仰を建設した以上は、吾人は實際既に此疑問を決斷して後説の勝利に歸せしめたのである。

人格的有智的の存在者として神を描寫することは吾人の總べてに極めて普通である。其の事は聖書の中に發見さるゝ。此等の聖

書に就き、舊教は神が靈感に依りて全書全部分の作者であるから、誤謬の必ず絶無なることを明言して居るし、又新教にては聖書を非常に尊敬して、之を神の語と名け、かくて聖書を各國にしかも各國語に於て頒布するの目的を以て、信者の寄附金を仰いで一大會社が設立せられた。其會社たる今も尙存立して非常に繁昌する。其國の言語を以て此書物を頒布しさへすれば、之を手にする總べての人民の道徳的心靈的狀態に不思議なる改善を施し得らるゝからである。

然らば吾人は萬物創造者の價值あり且十分なる表現を何處かと云へば此處に必ず獲べき筈である。

それで吾人が神の啓示たる本書を開くときに見出すところは



果して何であるか。劈頭吾人は萬物が如何にして七日間に造られたかを説けるかの古風の「ヘブライ開闢説に出逢ふではないか。如何にして光と晝と夜とが日に先つて造られ、如何にして日が晝を支配する爲めに、月が夜を支配する爲めに造られたか、其晝と夜とは既に造られてあるものを、如何にして陸地の現れ得ん爲めに地を覆ふ水が「寄せ集められたかを説き、又穹蒼の創造を記して上に貯へられたる水を支ふる大半球とするなどである。次には人間墮落の説話、即ち「エデン」と一旦の破戒に因りて人類を破滅に陥れしかの不幸なる夫婦との物語がある。

が、よしんば此等の事項にして、舊教が宣言して無瑕と爲し、新教が印刷頒布すること數百萬に達するかの正依經文に載せてある

こと疑ひないにせよ、今日に於て苟も眞面目に之を論じ且つ駁せんと企つるが如きは、教育ある多數の人々に取つて死屍に鞭つに過ぎざるが如き感なきを得ない。誰が今地球が宇宙の中心であり、日と月と星とが此地面の光明たる役を果さんが爲めに後に造られ、地の上に懸かれる穹蒼の支ふる水が、地球の表面を濕ほさんが爲めに雨となつて降ることを信するか、誰が此穹蒼なるものは單に幻視に過ぎず、其上の貯水の如きも、之と同様全く存在せざることを知らないか、誰が望遠鏡を窺ふ時、視線を遮り若くは妨ぐる穹蒼なるものなくして、唯限りなき天界の測るべからざる空間あるのみなることを知らないか。

多數の人は信者と雖も、此開闢説の科學的に不合理なる處や、此



神話の虚構に係る「エデン」の奇怪なる倫理に視線を向くことを避けて、此等古文書の弱點が果して基督教信仰の堂々たる大厦の堅固なるに影響するであらうかと問はんとする。

されどかゝる論旨は擁護の餘地がない。何となれば、ヘブライ教并に基督教は人間の墮落及び其贖罪と云ふ根本断定に基くからである。其説話は天國失墜の記事を以て始まり天國回復の記事を追加とする。然らば如何にして吾人は前者を放棄して、而も後者を保持せんとするか。若し第一の「アダム」と其不従順の恐ろしき結果とが神話寓言の範圍に追放せらるゝとすれば、如何にして吾人は第二の「アダム」即ち罪人の罪を贖ひ、原罪の不幸なる結果を打消さんが爲めに既に來り、或は將に來らんとするかの救世主の説話を

固執し行かんとするか。

併し或は曰ふであらう、吾人は此記事をば神の啓示せる眞理に屬するとして受納すべきであると。そは論點を假定せんとするものではないか。造物主は之を人間の無學に歸すれば其丈け自然に説明し得らるゝ、ヘブライ開闢説の不合理なる點に對し責任ありとすべきであるか。されど其場合に吾人の心に記せざるべからざるは、到底成立し難き開闢説を吾人に與へし同一の不十分なる權威が又人間墮落の説話を吾人に與へたことである。而して其説話たるや、倫理の範圍に於て亂暴を極め信用するに足らざるものなること、猶創造の始末が物理の範圍に於けるが如くである。

されど、ヘブライの聖書中に現れたる創造の記事に立歸つて言



はんとする。吾人は吾人の此創造記事を云々するは、主として造物主の性質及び方法に就て多少の暗示を與へんとするに在ることを念頭に置かなければならぬ。されば着目して甚だ價直あるは、六日間の創造事業の後、造物主は七日目に休息し、而も明白に七日目の休息を前六日間の勞作よりも非常に愉快に又満足に感せしことであつて、造物主が第七日を有りがたく思ふて、嚴酷なる刑罰を蒙れる人間に命ずるに、其例に倣ひて第七日には全く勞作を停止すべきを以てせし記事のある位である。それでかく休息を要し且つ之を樂むこと、かく勞作よりも休息を寧ろ好むことは、「ヘブライ」の神の性質に關して吾人に與へられし第一の光明である。併し説話の進むに従つて他の暴露が生じて來る。

「エデン」の説話にて、吾人は「アダム」と「イブ」とが或る不定の時期間不思議な程無邪氣の状態に在りしことを聽くが、遂に此の不思議な程無邪氣の状態が結局を告げた。そは惡の勢力が其配偶を通じて「アダム」に影響し、彼をして其自由行動の上に置かれし唯一の禁止を無視するに至らしめたからである。そこで神は怒りて彼等兩人を詛ひ、彼等の爲めに世界をも詛ひて、詛を萬人さては彼等の不幸なる後裔の遠き末々にまで及ぼした。此に神の性質と手段とが凄愴たる光を帯びて露はれて居る。神は此等の衆生を造り、衆生は其剛毅と等しく其軟弱をも神より直接に受けた。しかも以て衆生をして最初従順を缺かざらしむるとなく、東洋の無情殘忍なる暴君と雖も猶比肩すべからざる、恐ろしく且つ末の末にも及ぶ詛を



彼等の上に降したのである。されど彼等に加へられたる罰の性質を考ふることは必ずしも教訓的でないことではない。それは即ち「ヘブライ」の作者が知らず識らずの間に描寫したとしての神の性質上に、并にその企てし事業より推した作者の資格上に少からざる光明を投ずるからである。

罪人に與へられたる第一の罰は勞作であり、第二の罰は死であつた。「アダム」は其額の汗を以てパンを獲べく、又最後に其出で來りし塵土に還歸すべきであつた。

かく「ヘブライ」の作者が勞作と死とを人類に與へられたる罰として描寫することは、歴史と科學とが吾人に強ふる結論と全く乖離して居る。吾人は人間進歩の記録よりして、すべての進歩、智識及

び文明のあらゆる部門が勞力に基くことを知つて居る。而して啻に其れのみならず、吾人の經驗に於て勞作が富有に到るの道なることは猶疑惑が智識に到るの道なるが如くである。されば人間に對して如何にも價值あり、如何にも必要なる裝具と云ふべき勞作は洵に幸福であつて咒詛ではない。勞作は存在を甘味ならしむるものである。やゝもすれば陰鬱無氣力に陥るは怠惰の人であつて勞作の人ではない。

されどこは「ヘブライ」作者の意見ではなかつた。吾人は既に彼が神其者を休息を要し且つ樂むものとして、又特に之を有りがたく思ふものとして描寫することを知つて居る。かくて彼が人間墮落の事を記するや、第一に與へられし刑罰は勞働の義務なりしこと



を見るも敢て驚くに足らない。

此事柄に關し、如何に異りたる如何ばかり眞理に近き意見が吾が大詩人に依つて興へらるゝか、左の語を見よ。

若し一年中が遊んで暮らす祭日であるとすれば、戯るゝことは、働くことの如く懶いであらう。

勞作は「アダム」に蒙らされたる第一の罰であつて、第二の罰は死であつた。ところで死と云ふ事に就ては、「死は生の如く自然なり」と云はれて居る。こは如何にも尤な事で、獨り人間のみならず、一切の生類、一切の植物、天體——數々の太陽や世界——に至るまで其組織上進歩及び解體と云ふ必然の行路を経るに定まつて居る。しかるに「ヘブライ」の聖書には、死と云ふものは人類の創造以後、遙遠に

して察知すべからざる時期に、一雙の人間が唯一回不從順に陥りし重刑として之に科せられたる罰であると言ふてある。「ヘブライ」史家の見解にては、死を説明するには明に奇蹟或は神力の直接干渉を要するのである。近世の研究の結果を了知せる人の見解にては、不死を説明することを却て奇蹟或は神力の直接破格の干渉を要するが如く思はるゝ。存在の消滅と云ふ事は一切の造られたる事物の組織其者に含まれて居る。凡そ世に存在するものは悉く一定の期間のみ存在するのである。

是れ吾人が創世記の劈頭に見出す人間の墮落並に其結果の記事である。是れ人間の關係すべき神の性質方法である。此神が餘り薄弱なる動物を造りて、其遭遇せる誘惑に抵抗する能はざらしめ、



爲めに此の憐れなる者と其遠孫とを誼ひ且つ罪して、恐ろしき不幸刑罰を受けしめたと云はれて居る。

されど若し神にして激烈抑へ難き憤怒を發して、人類并に世界を誼ふことがあるならば、神は又悔恨を感ずることもあるであらう。此れが「ヘブライ」作者の信仰たりしことは疑ふ餘地がない。「エデン」時代を遠く去つて、神が世界の不正に充ち、人間の全く邪惡に陥りたるを觀し時、神は人間を造りしことを悔んで、之を破滅に歸せしめんと決心し、洪水と云ふ奇蹟を起して實行に取りかゝつたと明言されて居る。

さてかゝる狀況の猛烈制し難き憤怒と後に來る悔恨とは、東洋の宗教に於ける神の原形たるかの東洋の暴君の至て特色とする

所である。

有名なる回々教王「ハーローン、アル、ラシド」が其治世の始め、パン焼が目方不足の物を賣りしとして、命を下し之を其竈に入れて焼殺すや、王は後に國老に向ひ、恐らく其稍々早まりしことを懺悔せられたと言はるゝではないか。

同様に神は「バイブル」説話中に、最初激怒せし時其造る所の人間及び世界を誼ひ、後心和ぎ悔んで其罪せし人々に對して贖罪の方策を案出したと言はれて居る。

神は全種族が一人の不從順の爲めに苦まざるべからずと決せしと同様に、少くも何人か他人の從順の故に宥されざるべからずと定めた。人智が何れの命令をも道理あり或は正當なりと思惟



するは等しく不可能である。此命令は疑を挟まぬ服従を以て容認せられなければならぬ。されど救ひよりも詛ひが如何ばかり有力であるかを知るに於ては確に失望を免れない。萬人が苦まねばならぬが、少數より救はれない。多數が招かるゝかも知れぬが、少數より選ばれない。安全に趣く門は狭くあるが、破滅に趣く道は廣くして平である。

吾人の聖書研究の結果は其故に此くの如くである。即ち吾人は神が靈感に依りて全書全部分の作者であると云ふ舊教の斷言も、又「バイブル」は神の語であつて、之を研究すれば吾人を導きて真理の全體に達せしむると云ふ似寄つた新教の意見も容認することが出来ぬと云ふにある。

それどころではなく、考究し來れば聖書は幾分か眞理や卓越に到らんとする奮勵の表はれて、人間の性質に面目を施さしめながら、而も所在人間の無學や、人間の短處、制限、並に弱點の拘束妨害する所となつて居ることを吾人は見出すのである。

疑もなく「ヘブライ」の文學に於ては、其他の處に於けるが如く、多少の改良進歩が看られないでもない。年月の進むに隨ひ、他の觀念の如く神の觀念の進化がある。されど此場合に於ても最初の觀念の權威が餘りに強盛である爲め、何等偉大なる進歩を見ることが出来ぬ。神に關する當時の思潮以上に卓立せる豫言書の中には、洞察の明、評價の見が點々閃光を發して居るものもある。しかも此等は神を以て氣隨無責任なる專制君主とする古來の觀念に殆んど



變化を與へなかつた。

一步進んで若し人心が「バイブル」時代中に、一層高く一層貴き神觀を開展せしめたとするも、人心は尙遙に進歩して、人と言はず神と言はず、倫理的完全の一層高尚なる標準を樹てたのである。

今日、爰に一支配者ありて、人民が常に其寛仁ならんことを哀願し、陋劣極まる卑下を以て之に接近し、最も厭ふべき贊辭を以て之を稱揚すると云ふ條件の下に、人民の利益を攻究し増進せんと欲するならば吾人之を何と思ふであらうか、膝下に集る子と云ふ子をば悉く鞭つやうな父ならば吾人は何と思ふであらうか、其父と云ふ語に附せられた意義の進化を考へ見よ。そは極めて古き語であつて、昔のサンスクリット語より吾人に傳來した。されど吾人の其

意義に對する觀念が最近時に於てさへ變化せしこと幾何ぞ。さのみ長からぬ以前に、父と云へば其子に對して峻嚴なる支配者であつて、子は父の前に恐縮して之を「父君」と呼んだ。今日立派な人々に在ては、父は懐かしい寛大な伴侶であり、義侠で、大度で、寛容であつて、屈從などを賤むものであることは子の熟知する所である。聖書の學問に溺れた「ミルトン」も大目附と言つたではないか。今日の青年は人間の想像が萬物の父として描き出した者に尙一層適當した理想を養成することが出来るであらう。

さはあれ此進歩すると云ふ確な事實は、聖書防戰の新教者に供するに天啓辯護の新議論を以てした。彼等曰く、異議者は此天啓は即ち進歩的天啓なることを了解せざるべからずと。此宣言は信者



に大なる慰藉と援助とを與ふるものと思はれて居る。されど若し進歩的天啓にして後に辯破せられ、隨て謬見迷想として放棄せらるゝ言議を含むとせば、かゝる天啓は果して何の用を爲すことが出来るか。如何にして吾人は或る一定の時期——例せば現今——に於て、進歩的天啓の真正なる部分と、將來虛偽迷妄たることの分るやも知れぬ部分との間を區別すべきであるか。

且又進歩的天啓防戦の士にして、此進歩的天啓が如何なる點に於て、人間の研究する各部門に發見せらるゝ自然的進歩的なる智識の積集思想の進化と異なるかを説明し得るならば、或はせんと欲するならば、それは面白い事であらう。

造物主に關する「バイブル」記事の此の至て簡單なる評論に於て

は、唯二三の最顯著なる點に觸れたのみである。されど極めて異つた觀察より出發する幾何の思想方針が一樣に同一の結論に向つて集中するかを注意すれば、驚くに堪へて居る。即ち其結論たるや、苟も神の描寫にして試験を通過し、或は十分であるとか、價值あるとか、若しくは可能でもあるとせらるゝやうなものが聖書中にないと云ふ事である。こは思ふに萬物創造者の真相にもあらず、又真相とすることも出来ない。と云ふだけで其以上には及ばない。しかも此の消極的なる研究結果は進歩の道程に於て避くべからざる階段である。真理の探求を開始する前には先づ誤謬を誤謬と知覺しなければならぬ。種を蒔かんには地面を掃除しなくてはならぬ。吾人が「バイブル」中に靈感に基きたる隨て真正なる造物主の描寫



を有すと信ずる間は、更に進んで研究する必要何れにあるや、吾人が「バイブル」の記事を検閲し、拒絶して、初めて他の總べての方面に於て真理に達する手段と成れるかの材料を聚集して之より論理的に推度すると云ふ道が開けるのである。さりながら苟も信頼するに足る結論に到り得んが爲めに要する材料は、如何にも廣大なる範圍即ち實に物理学と倫理学との全版圖に散在するから、研究者の取るべき最良の方針に關する僅少の暗示助言以上に現今の何人よりも期待し得べきものとはないのである。其故に次章に於て余は此くの如き暗示助言を提供せんと欲するのである。

#### 第四章 宗教的智識の收得に歸納

法を用ふることに就て

思ふに宗教の領分に於て、他の研究範圍に用ひらるゝ其同一歸納論法に依りて真理を明にせんと提言する時、さやうな事は實行し難いと異議を出す者のあることは全く思料し得べきことである。如何にして神の性質と云ふやうな事に關する何等かの説を、物理的宇宙若しくは人間の性質又は經驗に就ての觀察並に特殊の事相を考へて組立つることが出来やうかと尋ぬるかも知れない。考へ來れば此事業たる最初一見して思はるゝ程困難なるものでは更でない。

宗教的智識の收得に歸納法を用ふることに就て



人の事業、即ち其既に爲せる事又現に爲しつゝある事を慎重に研究して、其人の性格氣稟に就き信頼するに足る評價を下すことが出来るであらう。而して若し果してさう云ふ事が出来るならば、何故に同一の方法が神の性質を確むると云ふ、一層困難なるには相違ないが類似の事業に應用せられて満足なる結果を生じないであらうか。

人の事業を研究すれば、吾人は少くも其性格氣稟の機分を洞察し得ることは毫も疑ひない。

吾人をして偶一個の模範村に來たと假定せしめよ。家々の設計には趣向ありて、住民の必要に正しく適合して居る。戸々配置の秩序あり、各戸を繞らすに小地區の花園を以てし、家庭に便利なる

事物を各戸に備へ、健康上の要求も一として看過されたものはない。村中には圖書館あり、又讀書室あり、又座上遊戯と力技運動とを行ふ娛樂室あり、要するに此れより以上詳細の事實を列擧せずとも、村は其外觀上決して人家の偶然的集合にあらず、有機的全體であり、明に何人か、豫め工夫を凝らし、且一定の目的の爲めに之を設計して造り成せるものたるの事實に斷乎たる證明を與ふるものと言つて差支はないのである。

ところでかう云ふ疑問が起る、此植民地に關する事實の慎重なる考察よりして、之を工夫せし人の性格に就き何等かの結論に果して到達することが出来るかと。此模範村を計畫せし人の或る主要なる特質は、其組織に就て吾人の目に觸るゝ個々の事實よりし



て安全に推論し得ることは分りきつて居るではないか。計畫者が才智あり先見ある人たることは明白にして、又人情あり慈愛あることも等しく明白である。其智力は他人の欲望を洞察し、其厚意は彼を促して他人の爲めに備ふる所あらしめた。

此くの如く吾人は此村の物質的事實の觀察よりして、之を工夫せし人の性格氣稟の或る要點に關し、極めて判然たる觀念を開發せしめ得ることを知るのである。

此簡單なる説明は以て物質的事實よりして才智と道德とに關する結論に進むことが十分實行し得らるゝことを吾人に悟らしむる。

して見れば神の性質を研究するに當り、善と惡との共存を満足

に説明すると云ふ困難——既に第一章に於て述べられたる——がなかつたならば、多くの趣味あり含蓄ある結論に到達することは實に實行し得べきのみならず、比較的容易であるであらう。

善と惡と、樂と苦と、喜と悲との存在を疑ふことは明暗寒熱の實際に存在することを疑ふと等しく無用の事であらう。吾が偉大なる思想家兼詩人は其得意の巧妙簡潔を以て此事を述べて曰く、

此限りなき宇宙には、限りなき善と限りなき惡との存在する  
と云ふ眞理を汝の心肝に銘せよ。

現在の事實を認識して之を否定せんと試みざる以上は、吾人の前に横はる事業は此等を悉く包容し、説明し、調和する一個の説を發見するに在るのである。



現今の宗教は「ニュートン」以前の天文學が占めたと頗る同じ地位にある。數多の觀察が爲され、巨多の材料が集められたが、吾人は未來の「ニュートン」とも云ふべき人の大法則若くは大原理を發見して、反對し衝突するが如く見ゆる事情や經驗の基礎を成し、説明を與へ、解釋を施すのを待つて居る。

吾人が宗教研究の領分に於て、物理學の領分に於ける重力の法則に相當する如きものに到達せん時、吾人の掌中に在る總べての錯雜せるが如くに見ゆる材料も其適當なる地位に納まり、かくて光明と智識との日が暗黒と無學との夜に代るであらう。

其間、而も此の未來の「ニュートン」が吾人に與ふるにかの神秘の解答、吾人の進路を妨ぐるかの問題の解式を以てするまでは、若し

何等か爲し得べき事ありとせば何事を爲し得べきであるか。

今爰に曲面積を確むる公式を知らぬ人ありて、球體の一分片の面積を定めよとの依頼を受けたと想像せんに、彼は如何なる方針を取るべきであるか、余は現在此疑問を精密に決定する方法を有せず、故に余は其につき推量を爲すべしと言ふ方彼の爲めに得策であらうか、決して然らず、其推量は何等の價值もないであらう、それは蓋し全く正鵠を失するであらうし、又如何にしても毫末の信用を獲得ることが出來ぬであらう、彼れの最良方針はかう言ふに在ること疑ひない、余は茲に余の現在の智識状態に於て取組の出來ぬ難點に遭遇して居ると見積るべき表面の曲つて居つて平でないと言ふ事實が障礙物なのである、然らば此解答に接近した觀



念に到達せんが爲めに余はかの難點を除去して、表面を平であつて曲つて居ないと假定しやう。余の由て以て事を成さんとする此假定が不正確であり、隨て余の達せんとする結果が不精密であることは眞實である。されど少くも其結果は判然たるものであつて、信するに足る程事實に近い。余はかの面積が少くもそれだけあることを確めて居るし、又更に進んで其誤謬が些少であつて過多でないことも知れる。測らるべき表面は實は曲つて居つて平でないから、その面積は必ず平であると云ふ假定で計算して得た結果より稍大きく、それより小さくないに極まつて居なければならぬ。されば此くの如き計算の結果が推量などより測知れぬ程大いなる價值を有するは明白である。

今吾人が神の性質を考察せんとするに當り、吾人は上に假定されたのに甚だ似たる困難錯雜に遭遇するの感がある。曲面が重大なる面も智識の或る状態に於ては打勝ち難き困難であるが如く、他の研究に於て之に相當するものは惡の存在である。而して兩方の場合に於て、若し吾人にして現在吾人を遮りて完全なる精確に達せざらしむる障礙を顧みずにはさへあらば、多少の進歩は期することが出来る。かくて吾人はさう云ふ風にして一箇の定まつた殆んど正しい結果に達することが出来る。こは絶對至極に信用すべきもの、唯智識の増進して、吾人がその度外視した難點を持出すことが出来、之を眼前に顯しても差支ない時に更に多少の調節を加ふる必要あるのみである。此問題の研究に對し此の如き方法を取



ることよりして得らるべき利益は、吾人が臆測に代ふるに推理を以てして、最も中つたとも云ふべき臆測の結果よりも、どれだけが知れぬ程信するに足る結果を得ると云ふことである。

其故に只今の處、惡の存在に因りて生じた問題の錯雜を避けんが爲に、試みに古代の「ペルシャ」人が二元力を假定して、一は善、一は惡、而も兩者互に等しと爲せるを正當なりと云ふとにして見やう。此説たるや恐らく終に正しからざる實を示して、一層正しき説の取て代る所となるに至るべけれど、さすがに其間は吾人をして惡に關係せずして善勢力の性質を研究するを得しむるのである。

さて吾人が假定の如く絶對完全に善なる者として神の性質を考へ始めんとするに當り、先づ神の何たるかよりも寧ろ神の何た

らぬかを決定するのは容易であらう。考へ來れば苟も神を描寫して人間の最善なる者より高尚にもあらず、寛容にもあらず、大度にもあらずと云ふが如きは斷じて神に對する誹議でなければならぬとを吾人をして納得せしめずんば止まない。此關係に於て吾人は過去の宗教が吾人に提供する神は絶えず賞讃と諂諛とを要求する者なりと云ふ神觀を如何に考ふべきかを察して見やう。吾人は其子供に向つて同様の事を要求する人を何と思ふであらうか。強健にして才智ある成人は小兒の薄弱なるに比べては限りなく大きく、強く、又賢くある。されど父ありて腕力才智の此く優秀なることが常に其子供に賞められんことを主張し、父が子供に對する親切、父が子供の失錯や過誤を宥恕することは此の如くいやに其



身を稱揚するに基くとせば、吾人之を何と思ふであらうか。而も是れ正に過去の諸宗教が一樣に吾人に提供した神観である。かゝる神観は神を誹譏するものである。若し之を以て苟も親切あり度量ある人の描寫なりとせば、それは即ち野卑なる亂暴なる又有害なる誹譏を構成するであらう。況んや吾々人間中の最大最善なる者より尙大なる又善なる神の描寫としては、とれだけ更に野卑亂暴又有害でなければならぬぞ。而して父若くは造物主を此く誤つて説くのは、果して子若くは被造物を裨益し得べしと想はれやうか。若し吾人にして其父が、かくも自尊であり、卑劣であり、又喝采を食望するものであることを假定するとせば、子は果して益を得るであらうか。又人にして萬物の創造者が、吾人の見且知れる多數の人々

より度量なく寛容なき者たることを信ずるとせば、其人果して利益を受くるであらうか。彼は憐みを垂れんと欲する者を憐み、無情ならんと欲する者に無情である」と云ふ。至高至大の者にして、かくも氣隨不公平なるは何事であるか。吾人にして其精神をかゝる虚偽無價値の神観より全く清淨ならしむるにあらずんば、吾人は神の眞性質の遠望だも期することは出来ぬ。

吾人をして人間の徳操あること、度量あると、善良なると、高尚なるとのあらゆる記録を研究せしめよ。吾人をして此方向に於て想像の極めて高く翔くるとをさへ忘るゝなからしめよ。何となれば人は如何にするも善の創造者たる神の善より尙一層高尚なる善を想像だに出来ないからである。かくて後、吾人は獨り自ら言は



んとする、造られたる者が如何に大度であり、如何に寛容であり、如何に聰明であるかを看たならば、造つた者は之よりも無限に高き智力感情の境界に在ることは確である」と。

此問題は廣大にして、予に所要の事を成すべき餘力が少しも残つて居らぬ。予は以上の暗示忠言を呈して古來未決の宗教問題に對する満足なる解釋を發見するの事業を他の少壯有爲にして予よりも遙に適任なる人々に譲らんとする。

寄る年波と永らくの病氣とは時々研究に従事することをしも段々困難ならしめ、かくて何時更に進んで勞作すること能はざるに至るやも知れず、此等の事情に因り、予は予の地位は單に道しるべと爲りて、他人に示すに正しき道、彼等を成功に至らしむる道、予

自身もはやたどること叶はぬ道を以てしなればならぬとを感じる。而して此個人的無能は必ずしも憾み若くは悲むに及ばない。其道たるや吾人の見る限り際涯なく、又前途の目的遼遠であるからである。

すべての人は、吾人の眼前に横はる重要にして又困難なる事業を遂行せんとして苦勞することが出來やうけれども、何人も其完成を見やうと望むことは出來ぬ。何となれば若し宇宙と吾人自身とに關する智識が常に進みつゝ、而も常に不完全なるを免れぬとせば、かの不可知のもの並に恐らく知り難き萬物の起原を完全に知らんとする如きは、益、以て望み得べきとではないからである。されど宇宙と吾人自身とに關する智識はよしや一部分にせよ、不完



全にせよ、人類に對し莫大計るべからざる價值あるが故に、吾人は此不可思議法界を案出し、非情有情存在の條件を規定せし神其者に關する智識の増加する毎に益、以て益を受くべく期待して差支はないのである。さやうな宗教的智識の到來せん時、人類の智力と感情とを拘束せず、又禁壓せずして、之を擴大し自由にすることは疑ふ餘地がない。

## 第五章 結 論

此小冊子の著者は本書が十分明瞭に書かれ、更に説明の必要なことを敢て信ずる。

されど一個の事情或は以て注意を喚起するやも知れぬ、それは即

ち本書が匿名を以て出版されると云ふ事實である。

之に對して幾多の理由があり得るが、少くも一個の適當にして且十分なる理由が確にある。

本書の表題に著者の名を逸することは、未來の宗教と過去の宗教との間の根本的差違に注意を引附け、又之を力強く言ふこととなる。從來の諸宗教に於ては、人格上の標識が優勢であつた。信仰の宣傳者、又あらゆる豫言者若くは使徒の態度と云ふものは、常に神明よりの或る特別な消息を發表せんとする人の如くである。此の如く神は曰ふと云ふのが正當なる方式である。而して靈感に由りて神より人に下れる此消息は信者に依て柔順に迎へらるべく、咎立やあげつらひをせらるべきでない。



されど未來の宗教の場合に於ては全く事情を異にする。吾々の中  
の何人なりとも、譬へば甲なり或は乙なり、丙なり或は丁なりが  
本題を研究し、決論を下し、又其等の結論を其依て立つ議論と共に  
出版する。

而して讀者の考察すべき問題は、甲なり或は乙なり、丙なり或は  
丁なりが何人なるかと云ふ事にあらで、發表せられたる意見と、之  
を擁護する議論とが健全にして人を納得せしめ、且さうなくては  
ならぬやうであるかと云ふ事に在るは始終肝に銘じて猶且つ足  
れりとしなさい。

獨斷的の主張は、之を爲す人々の性格、地位、並に權威より生じ來  
るが如くに想はるゝ擁護を要する。

されど一個の議論の價值は、全く其前提の十分なることゝ、其論  
理の健全なることゝに因る。其議論の作者に關する人格上の問題  
は見當違の事であつて、やゝもすれば人を邪路に導き易い。

是を以て吾人は出來得る限り人格的要素を排斥し、道理の命令  
にのみ訴へなければならぬ。それが即ち未來の宗教と過去の宗教  
との間に存すべき根本的差違である。此れは道理を基礎とすべく、  
彼れは權威を基礎とした。議論は信仰に次で來るものである。  
其必ず然らざるを得ざる所以は、信仰は覺束ない奸詐的根據を  
與ふるからである。議論は何が眞實であるかを吾人に會得せしむ  
ると同様或は之より以上に何が虚偽であるかを吾人に會得せし  
むるものである。



あらゆる形の偶像崇拜を含有するあらゆる宗教は信仰に根ざし、教義信条に支持せられて居る。かくて信仰の種々の形が衝突する場合に訴ふべき唯一の處は道理の法廷である。

而して此事の如何にも眞實なるは、信仰が眞の宗教即ち彼等自身の宗教の唯一安全の基礎たることを極めて強く主張する人々すら、猶且議論に依り、又かの議論の最も有効なる形の嘲弄諷刺に依りて、偶像教並に彼等の好んで偽宗教と名くるものを判断し非難せんと十分身構へて居る程である。

されど道理は常に信仰の種々なる形を辨別すべき器械として必要なるのみならず、それは實に人間の意見と云ふ意見、信仰と云ふ信仰の唯一確實の根據である。

白痴は毫も精神力を有せざれば、他人が尊敬するに足る程の意見を立てる能はず、又何等の信仰を持つことも出來ない。而して信仰が其宗教の唯一基礎であつて、道理がさうでない、と云ふ事を自得せる人は、己をしてさやうな地位を承認し占有せしめんが爲めには、故意に行ふと云ふことが必要であつたと云ふ事實を看過し或はみづから遮蔽して居るのである。

要するに吾人にして眞理を發見し、未來の宗教と云ふ永久的建築を起さんと欲せば、吾人は人間が何事に關しても、之に依てのみ或る確實なる結論に到達し得たかの研究法并に推論法を嚴守しなければならぬ。

萬人悉く智識に到る其唯一不可避の行路を使用することが出



來る。而して之を使用する各人は誠實に單純に一個の「眞理探求者」と云つてよい。

## 過去の宗教と未來の宗教終

### 附録

#### 英國の新聞雜誌上に於ける本書の批評

##### 其一

本書は一個謙遜なる小冊子にして、過去の諸宗教が宗教の問題を解釋する能はざりしこと、并に吾人は是非一層合理的の方法を採用して、以て未來の宗教を建設せざるべからざることを入々に説き勧めんが爲めに著されたるものである。

##### 其二

吾人は爰に宗教の過去と未來とに關する簡單なれども慎重に



考案せられたる一續きの論文を有する。著者はすべて吾人の困難と疑惑とに對しては、現今の科學的道理の援助を借り來らざるべからざることを辯明して居る。而して讀者が著者に同意するも將た然らざるも、其用ひたる強力の論理と、著者の明かに誠實なる目的とは賞讃せずには居られない。

## 其三

此思慮深き小冊子に於て、著者は未來の宗教に於ける人格的要素を排除し、唯道理の命令にのみ訴へざるべからざることを提言して居る。著者は熟達の智識もて東洋の古代人民の信仰に關して叙ふる所あり、彼等の概念の缺點を指摘し、又基督教の倫理に就て若干手痛き言辭を弄して居る。著者は神學及び哲學に於ける當面

の問題に通じて居るやうである。叙述の明晰なる同類の著書に稀に見る所である。彼れの追求する宗教的智識は人類の智力感情を擴大し自由にするに云ふのである。

## 其四

著者は神と人との間の關係に就ての問題を考察し、靈感と默示とに基ける大宗教を検査し、かくて獨斷的言説に代ふるに科學的研究を以てすべきことを辯明する。

## 其五

本書は世界の宗教の研究に科學的方法及び原理を應用すべきことを主張する。爲めに「カルヴェン」佛國の有名なる宗教改革者若くはボナヴェンティユラ「中世の伊太利神學者」よりも寧ろ「ペー



コンが出來得る限り人格的要素を排除して、道理の命令にのみ訴へんとする將來の宗教に對する指導者と看做さるゝ。暗示に富み且眞面目に書かれたる書なれば、みづから考ふることを好む諸人には趣味を以て讀まるゝであらう。

## 其六

此小冊子に於て、宗教は制度や儀式遵奉より成立するとして、なく、其最廣き又最一般なる形相に於て取扱はるゝ。著者は宗教と云ふものは神人間の關係を論すべきものであると言ふ。さすれば吾人當面の問題は、何人が何時之を見たと言ふこともなきかの存在者の性質に就て何とか確むるにある。かくて先づ此問題の解釋と稱すべきものが既に發見せられたかを知らんとて、大宗教が檢

査された。其大概のものは靈感若くは天啓に基くと云ふのであるけれども、其所説たる區々にして衝突し、吾人を疑惑の中に置くことと依然たる有様である。此等の事情あるが故に、セネキス氏は獨斷的言議に代ふるに科學的研究を以てせんことを主張するのである。本書は叙述簡單にして、其内容は痛く緊縮されて居る。されば之が梗概を満足に作ることは不可能である。此事項に興味を有する人々は本書其物を閱讀しなければならぬ。

## 其七

本書に於て著者の目的とする所は、「バックル」が歴史を論じた例に倣ひ、宗教の研究を科學的基礎の上に置くに在る——即ち今後宗教の研究には、通例各種の科學に於て眞理探究の爲めに用ふる



所の方法を取るべきことを主張するに在る。此事項は表題に示された二つの部分に於て論せらる。かくて本書は多くの思考と研究との成果であることは明である。

## 其八

本書の匿名著者は自ら稱して表題に「セネキス」(老人)と謂ひ、其論文の結尾に「眞理探求者」と謂ふて居る。彼は雙方であるらしく、成程此處彼處に眞理を發見せんとする眞正の願望が表はれて居る。されど不幸にも此探求者は其道具を使用する方法を殆んど心得て居ない。熱誠なる暗示と云ふことを外にして本書の爲めに云ふべき事は無い位である。本書は至て平凡で、生硬で、未消化である。それは又若干の不必要なる害毒を含んで居る。例せば創世記の初めの篇々

を手引として、著者は「バイブル」の神は苦しき努力よりも恥づべき安逸の方を選ぶこと、神は東洋が曾て生せし如何なる暴君よりも一層無情殘忍であること、又神の詛ひは其救ひ(即ち贖罪)よりも遙に有力なることを斷言して居る。積極的方面にては著者は古來の意匠論を大に信仰し、未來の宗教の其上に築かれざるべからざることを深く覺悟して居る。打見た所彼は之が應用に就き他の人々の感じた難點に惱まされないうやうに見ゆる。が、實に本書全體は皮相的のもので、學者には何等の價值なく、一般の讀者にはそれよりも更に少い價值(價值と言ひ得べくば)がある。セネキス氏をか「天使が踏むを恐るゝ處に突進する向ふ見ずの人々の一人」と考ふるは氣の毒であるけれども、氏や恰も其人であらんばかりに見ゆる。



## 其九

此小論文の重なる價值は、著者の力にては解釋覺束なしと認めらるゝ一個の問題を提示するに率直なることがいくらか人を引きつけるところに存する。宗教の事柄に於ては吾人は其要求に於て謙遜なるの風があり、一個の解釋とは到底謂ふべからざるも眞に貢獻する所あるものは歓迎せらるゝであらう。併し「セネキス」氏の終りに言へる語は、殆んど此事項は廣大にして所要の事を成すの餘力氏に無しと云ふのである。かう言はれては自然批評の鋒尖も鈍つて仕舞ふたとひ吾人をして何故に氏が明に其力量以上の事業を公然企てたかの疑惑中に彷徨せしむるとは云へ。困難なる疑問に答ふるよりも之を質す方が比較的容易であるから、此論文

の批評的部分が其建設的部分より善く出来て居ることは誰も豫期し得る所である。大なる世界的宗教の答に簡單にして無趣味ならざる檢閲を加へて以て宗教の問題に接近せんとして居る。婆羅門教及び佛教の汎神觀が輕少にして而も全然不適當なる考察の後一舉にして排斥せられた。一神教的組織も其明瞭なる二元主義である。と、惡と云ふ常に起る問題に何等満足すべき解答を與ふることの出来ぬとの爲めに棄却せられた。然るに奇怪の至りなるは、結局著者の神觀も之と等しく古來の兩刀論法に對する一個の答案を具備せざることである。其故に彼は之を除去せざるべからざる難點として取扱ふこと、恰も曲面の問題が單に精確に近いと云ふことだけにして置けば往々平面の問題として便利に取扱はれ



得るが如くする。本篇は眞理を求め思慮を凝らす精神の發現であつて、未來の宗教は獨斷や教義とは別物たる道理の信仰に其根據を有すと云ふ最後の議論には多くの人が同情するであらう。

## 其十

此有毒なる天啓攻撃の著者が其名を匿すは尤の事である。彼は過去の諸宗教たるや猶太教基督教をも籠めて東洋より發出したるを以て、西洋の道理とは兩立し難いと主張する。「バイブル」は人間の無學と缺點との爲めに所在拘束され妨害されて居る。それで吾人は「バイブル」を神の奇怪なるポンチ繪として排斥するにあらざれば、神の智識と將來を支配すべき眞宗教の構成とに何等の進歩を爲すことが出來ぬ。「セネキス」氏は吾等自身の如く吾等の隣人を

愛せよと云ふ基督の命令を謙遜の態度もて是認するが、其前命令汝は汝の全心全力を以て神を愛すべし等を吾人は吾人の知らぬ所の神を愛する能はざるが故に實行不可能と宣言する。此くの如く信仰を攻撃するに用ひられた其反對なり議論なりの仕方は陳腐未熟であるけれども、年若き或は無學なる基督教者の精神の平和に危険であるかも知れねば、本書を避けるやうに注意しなければならぬ。かの輕蔑されたる「バイブル」の少くも左の一言の眞理なることが此著述に依て證明せらるゝ、自然的の人は神の事物を受納しない。何となれば此等は彼に取つて愚なるからである。又彼は此等の事物を知ることが出來ない。それは靈的に認識せらるゝものであるからと。



附 録 終

明治四十四年二月二日印刷  
明治四十四年三月八日發行

過去の宗教と未来の宗教

著作権所有

定価金二十五錢

譯者

虎石 惠 實

發行者

大橋 新 太 郎

印刷者

水 谷 景 長

印刷所

博文館印刷所

發行所

(東京市日本橋區本町三丁目)

博文館

振替貯金口座東京二四〇番



文學博士 加藤玄智君譯 (全一冊菊判紙數三百十六頁) ●發行所博文館●

# 世界宗教史

上製 郵正 稅價 五拾五  
並製 郵正 稅價 四拾 錢錢

主觀的空想の思辯を排し確乎たる史的事實に據りて宗教を學ばんとするは最近十有餘年間に於ける時代精神の主潮なり此に於てか人は最早佛教若くは基督の如き特種宗教の歴史のみを知りて獨り安んずる能はず又更に進んで世界に於ける各宗教の全般に亘りその發達開展の有機的關係を史的事實に照して比較攻究する世界宗教史に待つあるや日に切なり本書能く原書の要を抜き譯文簡明暢達なり宗教學に志ある者一本を藏めて几時の好侶たらしむべし

文學博士 姉崎正治君著 (全一冊菊判紙數四百頁)

# 宗教哲學

上製 郵正 稅價 五拾五  
並製 郵正 稅價 四拾 錢錢

本編はカント、ヘーゲル、シエリングの宗教哲學論を統合し、シライエルムツヘル、ビーデルマンの基督教哲學を批評し吠壇多の無宇宙論佛教の涅槃論を精査して、東西宗教の粹を蒐め古今哲學の結果に依りて、宗教哲學の一大系統を組織したるものなり、苟も人生の大問題たる宗教に懸念する人は、此書を以て指針と爲さば、理論に實際に鞏固なる基本を得ん。

法學士 工藤重義君著 (全一冊菊判三百四十二頁) ●發行所博文館●

# 世界宗教制度論

上製 郵正 稅價 五拾五  
並製 郵正 稅價 四拾 錢錢

本書は世界文明諸國に於ける宗教制度を彙類統合して法理上より之を論述したるものにして材料は曹洞宗高等學林に於て講述せる講本を骨子とし獨佛の諸書及我邦の制度學說等を參酌したれば記述系統ありて定論縱横殊に卷末には餘論として宇内平和論及犯罪救濟論を編せり共に法學研究の範圍に屬して而も宗教的事業に密接の關係あり大方爲學の士是非一讀を要すべきなり。

文學士 高木敏雄君著 (全一冊菊判三六六頁)

# 比較神話學

上製 郵正 稅價 五拾五  
並製 郵正 稅價 四拾 錢錢

本書の目的は神話學の一般概念と斯學に關する一般の智識を與へんとを欲するにあり、是を以て先づ第一に神話學とは如何なる學なるやを説き其由來と起原とに關し其歴史の大體を説き從來學說の變遷を叙し以て最近のそれに及び諸説の長短優劣を比較評議し第二章以下の五章に於て神話學上の問題にして必ず日本神話に關係あるものを撰擇して之を評論せらる著者が斯著の上に傾注せられし用意蓋し周到なり



東京帝國大學 文學博士 姉崎正治君著

●發行所博文館●

菊判特製美本

正價金壹圓四拾錢

小包料金拾貳錢

# 根本佛教

全一冊

## 東京日々新聞評

〔前略〕著者の佛教觀は如何、曰く「一切の信仰皆師主の人格に集中し、師主の歸依とする點より言はゞ、佛教は全く信賴の宗教なり。されど佛教は内容より言はゞ心靈自覺の宗教なり、單に自己以外の佛陀を崇拜するは、佛徒の能事に非ず、自己心靈の内に佛性を開發するはその理想なり後世佛教の中に他力の信仰を生ぜしは、信賴の一面を發達せしめしものなるも、佛教としては聖道修行、自心成佛を本義とす」と。「根本佛教」一卷は畢竟此の見解の説明なり、註脚なり。著者は先づ佛教の位置より説き起して、その思想の淵源を明かにし、佛陀の人格より進んで苦集滅道の四諦を詳述し、最後に僧伽の性質活動を叙してその氣を瀾きたり。讀み去り讀み來れば、所謂根本佛教よりして枝葉果實に依つて出づる所以、八宗九宗多岐の佛教も、その源泉を同じうする所以、宛ら掌を指すが如し。吾等は宗教史詩を誦するの心地しつゝ、此の一卷を讀み終へたり。原始佛教を闡明し得て、本書の如く精密を極むるは、東西悉くは匹儔少なからん。若し強ひて嫌らぬ點を舉ぐれば、第四編に於ける轉法輪の説明に在り、佛陀其人の自覺と歴史的信念、民俗的傳説との交渉未だ明かなりとは謂ふ可からず。第五編以下に於ける佛教其者の解明に至りては、眞に是れ快心の妙文字也、依つて以つて釋尊大悟界の風光を髮鬘するに足る。

東京帝國大學 文科大學講師 文學士 堀謙徳君著 ●新版● (博文館發行)

# 美術上の釋迦

全一冊

菊判 上製  
紙數 三百三十頁  
正價 金壹圓廿錢  
郵稅 金拾貳錢

附 錄

釋迦傳教地圖。佛書解題。新發見史蹟

口 繪

外に古代密畫挿入

釋迦一代の事蹟、南北佛教の淵源、悉く印度美術上に表現す、本書は釋迦の事蹟、佛教の淵源に關する印度古代彫刻の寫真七十有餘を複寫し、一々是が圖解を施し、是が典據となるべき梵漢佛典の本文を和譯し、更に當該事項の參考書類を叮嚀に明示したるものにして、之を正面より見れば佛教美術の解説となり、之を背面より見れば釋迦一代の傳記となり、又更に之を側面より見れば佛典研究の指導となる美術趣味を以て釋迦の人格、佛教の淵源を知らんとする江湖諸君に向て本書を提供す。



文學士 融 道玄君譯 (全一冊菊判三一六頁)

# 宗教進化論

並製 正價 金四拾錢  
郵稅 金八錢  
特製 正價 金五拾五錢  
小包 金八錢

本書は現時英國第一流の哲學者にして牛津大學ヘルリオル、コルレッツゲ學長たるケヤード氏が深遠なる學識と透徹せる眼光とを以て宗教の發達を討究し、宗教が客觀教、主觀教、絕對教の三大段階を成して有機的に發達進化したる所以の理法を詳述し希臘の宗教佛敎基督教に就て之を例示したる名著にして所論清新博大實に宗教學上無二の證典たり

文學博士 姉崎正治君譯 (全一冊四六判上製四九〇頁)

# 美の宗教

正價 金壹圓  
郵稅 金八錢

本書は基督教國の一美術家と佛教國の一宗教研究者とが思想を交換して美の宗教を宣明せんとしたる一編人生宇宙を美の進化、人格の融合の活劇と觀じ、文學、戯曲、音樂より脱き起し、細胞生活より星界に上り個人、家族、社會、國家の神靈の歸入に及び靈魂の不滅、神靈の顯現に到る、終りに佛敎を詳論し、並に編者の此主義に出たる論文數編を收めたり

海老名彈正君閱 赤司繁太郎君編

發行所博文館

# 耶穌の聖訓

全一冊 袖珍七百八十頁  
上製正價金壹圓  
總革正價金壹圓廿錢  
小包料各 金八錢

歐米思想界の現狀に通ずるものは「耶穌の教訓」が其中心問題となれるを知らざるものなるべしこの書上編經部は聖書自身をして此問題に答へしめたるものにして下編論部は聖書全體より、神、人、キリスト、聖靈、救濟、人間の行爲各種々なる宗教道徳上の諸問題に關する教訓を撮抄したるものなり之を以て斯書やキリスト教の何たるを説明せる一大パノラマたるなり而して一般國民の爲に修養の資料たるべくして墮落せる現世を救ふに於て恰好の藥物たるを信す乃ち敢て之を薦む

## 宗教書類

- 文學士 藤谷深勵君著 ● 基督教史 並製 四拾錢 郵稅八錢 特製 五拾五錢 小包八錢
- 文學士 石原即開君著 ● 日本佛教史 並製 四拾錢 郵稅八錢 特製 五拾五錢 小包八錢
- 文學士 蟄川龍夫君著 ● 佛敎倫理學 並製 四拾錢 郵稅八錢 特製 五拾五錢 小包八錢
- 文學士 石原即開君著 ● 佛教哲學汎論 並製 四拾錢 郵稅八錢 特製 五拾五錢 小包八錢
- 文學博士 前田慈雲君編 ● 佛教美術 並製 四拾錢 郵稅八錢 特製 五拾五錢 小包八錢
- 文學士 常盤大定君纂 ● 佛陀の聖訓 並製 八拾錢 郵稅八錢 特製 壹圓 小包八錢



博文館發行 帝國百科全書中 哲學書類目錄

- 純正哲學 上 下 ..... 文學博士 井上 圓了 著
- 哲學汎論 ..... 文學士 藤井健治 著
- 新西洋哲學史 ..... 文學士 岡島 誘君 著
- 西洋哲學史 ..... 文學博士 蟹江 義丸 著
- 支那哲學史 ..... 文學士 中內 義一 著
- 近世美學 ..... 文學博士 高山 林次郎 著
- 處世哲學 ..... 文學士 杉谷 泰山 著
- 儒教哲學概論 ..... 文學士 嶋川 龍夫 著
- 論理學 ..... 文學博士 高山 林次郎 著
- 東洋論理學史 ..... 文學士 香村 宜圓 著
- 進化論 ..... 文學士 十時 彌君 著

- 社會進化論 ..... 文學士 小山 東助 著
  - 認識論 ..... 文學士 淀野 耀津 著
  - 社會學 ..... 文學士 十時 彌君 著
  - 倫理學 ..... 文學博士 蟹江 義丸 著
  - 日本倫理史 ..... 文學士 有馬 祐政 著
  - 東洋倫理學 東洋倫理學 ..... 文科卒業 木村 鷹太郎 著
  - 社會倫理學 ..... 文學士 德谷 豐之助 著
  - 近世心理學 ..... 文學士 德谷 豐之助 著
  - 心理學 ..... 文學士 速見 澁君 著
  - 兒童心理學 ..... 文學士 松本 孝次 著
  - 社會心理學 ..... 文學士 小林 郁君 著
- 各冊洋裝菊判美本  
紙數三百頁以上  
製本並製特製二樣
- 並製 正價 金四拾錢 郵稅 金八錢  
特製 各正價 金五拾五錢 小包 金八錢



京都同志社教授  
京都帝國大學講師  
神學博士 文學士

シドニーギユリック先生著

●發行所博文館●

# 新進化論

全一冊

洋裝菊判特製函入美本  
紙數六百五十頁  
正金貳圓卅錢  
小包料金拾貳錢

本書の特色は

「宇宙の進化」「地球の進化」に「生物の進化」に関する、最近最新の學說を  
平明精確に叙述したる點にあり

例へば

「今より四年前に起りたる「宇宙及び地球の新進化説」又は「ダーウイン以後の新進化論」を明確に示して、容易に其要領精髓を味はしむるが如き在來の邦文進化論書の上  
に一頭地を抜くものと謂ふべきなり

著者は、生來化學的の頭腦を有し、進化論の研究に思を凝らす事、茲に年あり。本書は著者が殆んど

有る進化論書を精讀し咀嚼して成りたるもの

其の間七ヶ年の長歲月を費せり

而して、著者の叔父ジョン、ギユリック氏は、ガルウイン及びウオレンスに認識せられたる有名なる進  
化學者なれば、著者の進化論に於ける素養蘊蓄尋常一様にあらざる事亦偶然にあらざるなり。その最も  
苦心せしは進化論を成るべく解し易き機通俗平易に叙述したる點にあり。故に何人も此書を讀めば能  
く進化論の要諦を理解するを得べし。

シヨベン  
ハウエル 大作

東京帝國大學  
文科大學教授

文學博士

姉崎正治君譯

# 意志と現識としての世界

全三冊

洋裝菊判  
總ク  
上卷七百五拾頁  
挿書數葉

上卷 正價金壹圓八拾錢

小包料拾貳錢

●中下卷未刊●

本書の眞價!!!萬朝報は本書を評して曰く

シヨベンハウエルの原著を、原著者死後五十年の紀念にとて姉崎博士が譯せ  
るもの也、シヨ氏はカントに發足して深く印度哲學に入り思想界に於ける東  
西兩洋の二大流派を融和したる點に於て西洋哲學史の異彩なると共に東洋よ  
り西洋に接したる現代日本人と相似たる所なきにあらず譯者姉崎博士は廿年  
來のシヨ氏研究者にして譯筆叮嚀親切、一語一句もゆるかせにせざるは勿論、  
コンマ、セミコロンの切方に至るまで努めて原著に忠ならんとせる近來最も  
苦心せる且つ眞面目なる出版物の一也、卷尾の譯語對照索引是非なくてはなら  
ぬもの

博文館發行



井上文學博士序文 木村鷹太郎君著

●發行所博文館●

# 東洋倫理學史

卷上

洋裝菊判洋布背皮特製  
紙質精良印刷鮮明  
正文千六百頁 目次三十六頁  
正金貳圓八拾錢  
小包料金拾六錢

東洋倫理學史の著者は本書を以嚆矢とす、此書は著者數年間苦心研究の餘に成れるものにして、叙述詳

密引用正確、着眼卓絶、所の評論は銳利にして議論は大膽、而

條理整然たり、今其上卷の標榜を擧ぐれば

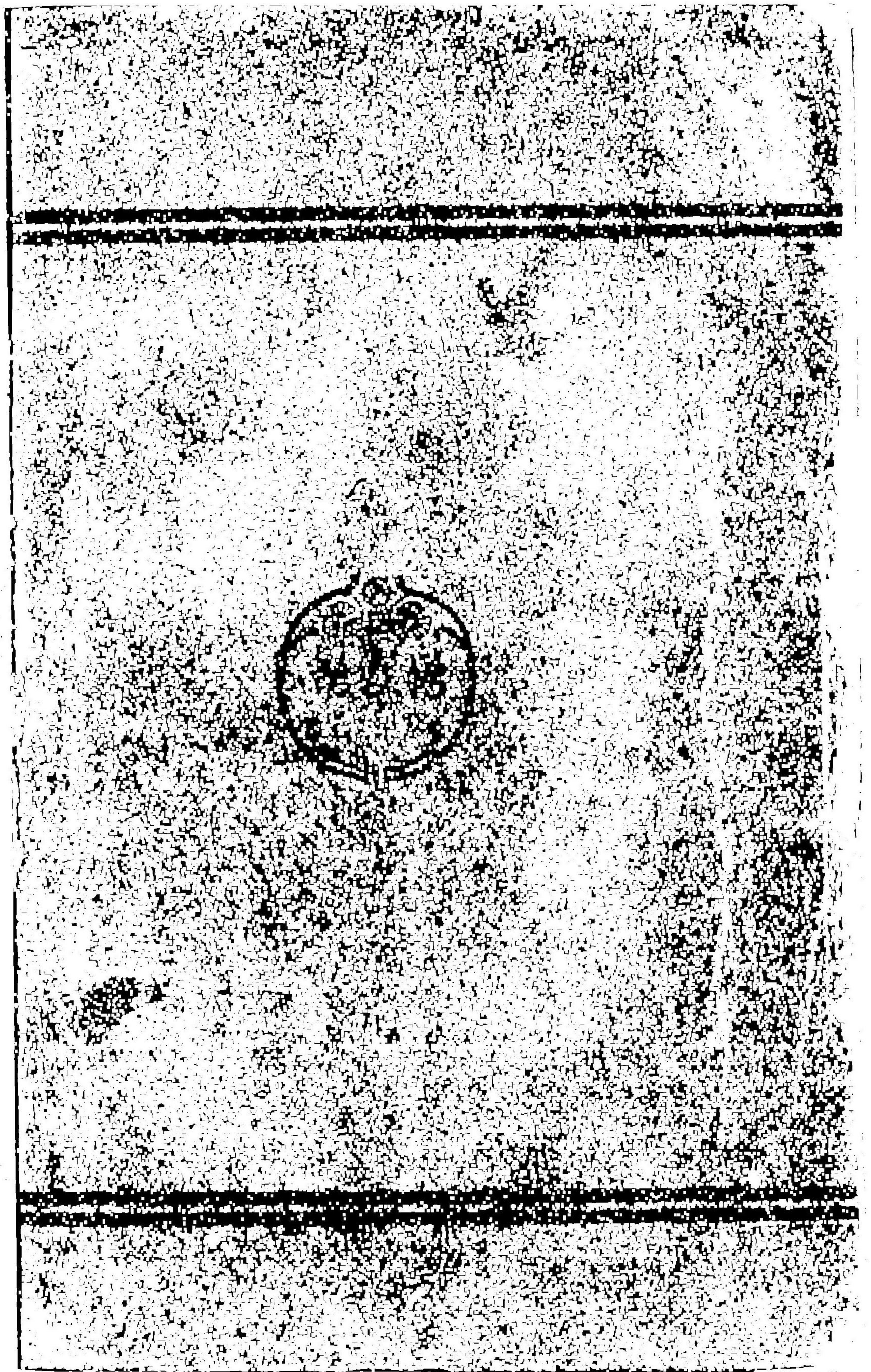
◎緒言——倫理學に對する各方の觀察及解説 ◎支那之部には——○伏羲より周公に至る迄の諸聖賢○天に付ての觀念周

末倫理學說に管子を初め老子、孔子、子思、墨子、楊子、列子、莊子、孟子、荀子、商子、韓非子、李斯及始皇帝等の傳記及學說を掲げ其主義、方法、當時の事情、各説の反目乖離等を布衍解剖して精細細論其蘊奥を極め○易の倫理學思想なる標榜の下に「模範的法則の客觀的存在」「倫理の根本」「人倫の起始」「實利主義」「善惡應報の度量」提要に別ちて其本體を抉出論じ○附録として「倫理學に實踐學に非ず」の說を掲ぐ章を分つ十有五目を立つる無慮數百反復精緻を極む



1525  
1531

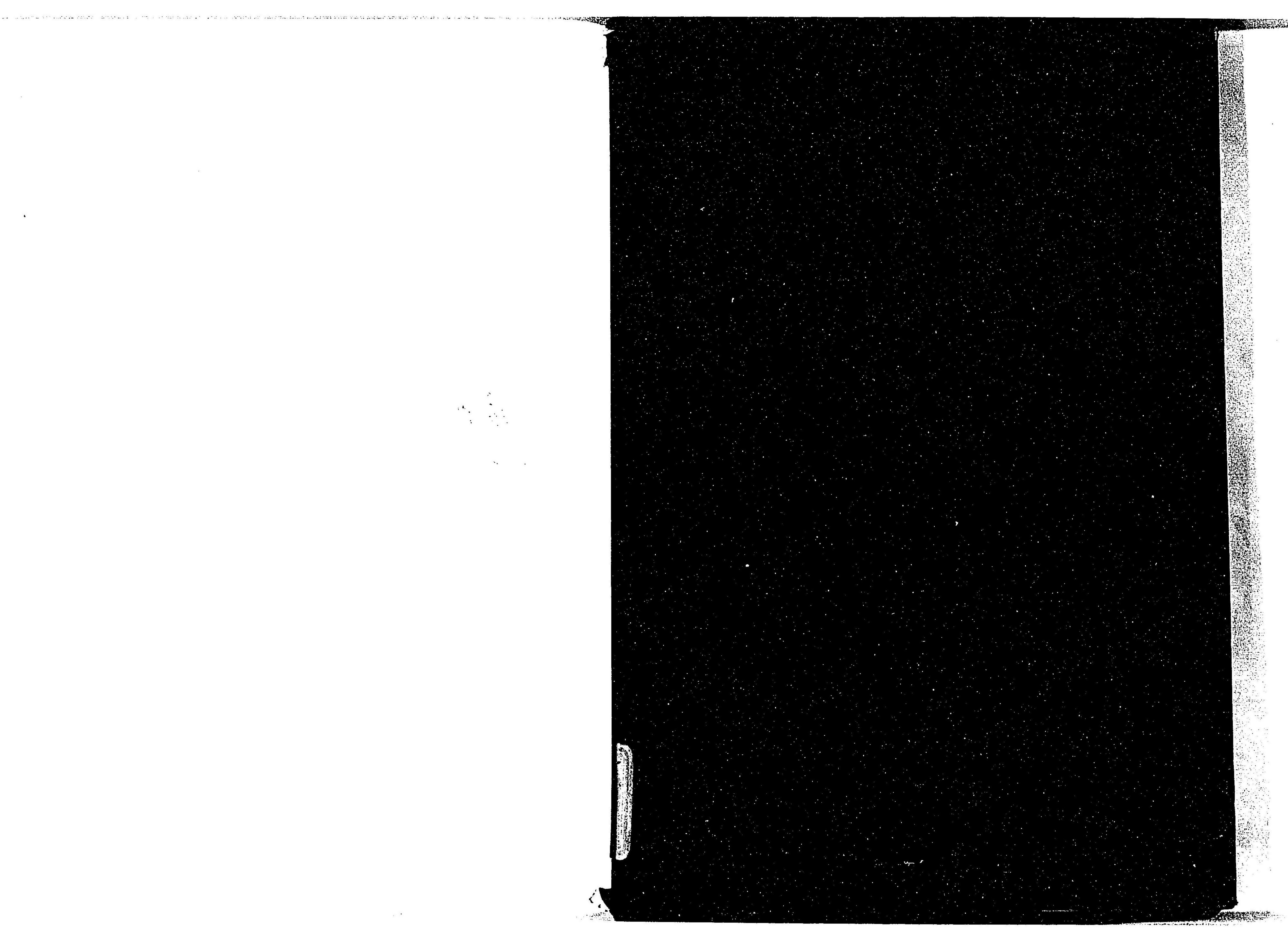




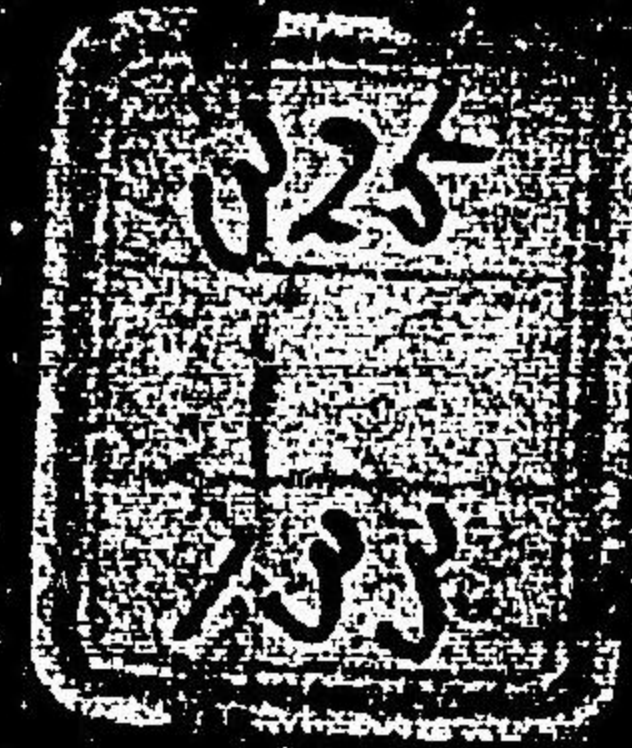


325  
133









013558-000-9

325-133

過去の宗教と未来の宗教

セネクス/著

M44

ABA-0020





